

2019 年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

(グローバル型)

研究開発実施報告書【第1年次】

和歌山信愛中学校高等学校

はじめに

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田 登志子

「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」（以下「地域協働事業」）研究開発実施報告書の巻頭言にあたり、SGHアソシエイトプログラム活動からの7年間、これまでに様々な形で多くの方から有形無形のご協力をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

本校の設立母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のコンセプトは、「生まれたばかりの無力な赤ん坊のイエス（幼きイエズス）様を、見返りを求めずに守り慈しむ強く優しくしなやかな母マリア様のような女性を育成する」というものです。「幼きイエズス修道会」は貧困家庭や孤児の面倒を見るという活動から修道会に発展し、フランスの片田舎ショファイユで1859年に創立されました。明治の初めにフランスから4人のシスターが来日し、大阪で同じような活動を始めました。明治初めの日本はフランスからみると未知の国で、4人のシスターたちのチャレンジ精神やエネルギーたるやそれは大変なものであったと思います。当時の手記をみると、来日後は地震に驚かされ、蚊に悩まされ、「人攫い」の類の誹謗中傷を受け・・・と大変な苦労の中、自分たちのシーツを裂いておむつにし、米を重湯にしてミルク代わりにするなど献身的に活動しながら周囲の理解を得、その活動を広げていきました。修道会の創設以来、本校にも脈々と受け継がれているのが、見返りを求めず人に尽くす、可能性を追究する、物事や人の背景を考える、持っている力を伸ばす努力・工夫をする、という理念です。この理念は今まさに必要とされている問題解決能力、チャレンジ精神などに合致するものであり、地域協働事業プログラムは、本校の理念を体現できるものと言えます。

SGHアソシエイト校に指定される1年前から本校のプログラムを進めてまいり、今年で7年目を迎えますが、全くの手探り状態、ゼロからのスタートだったことを考えると、感慨深いものがあります。当初は1学年だけ、和歌山市内だけのプログラムでしたが、徐々に1学年から高校全体へ、和歌山市内から和歌山県へと活動範囲を広げていきました。この間、ご協力いただいた企業、大学、地方公共団体の皆様のおかげで、生徒たちにも変化が出てきました。明らかに積極性、アクティブさが増してきたのです。「トビタテ！留学JAPAN」やその他の色々な企画に応募したり、自分たちで研究したいテーマを見つけ発表したり、と学校の特色に「積極性」のカラーが加わった感があります。今までの苦労が報われたとても嬉しいことでした。

地域協働事業では、地域と世界の両方の視点を持って社会に貢献していける女性「Key Girl」を育てることを目標にしております。本校の生徒が少しでも地域に貢献し、それがこれからの地域での女子生徒のモデルの一つになることを楽しみにしています。

本校のプログラムは、まだまだ未完成で皆様のご協力を必要としております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2019 年度文部科学省指定
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」
研究開発実施報告書【第 1 年次】

はじめに	1
目次	2
I 研究開発の概要	
① 研究開発概要図	3
② 研究開発の概要	4
③ 育成を目指す人材像	6
④ 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制	
⑤ 海外交流アドバイザー（グローバル型のみ）・地域協働学習実施支援員	
⑥ 三カ年の実施内容、実施方法およびスケジュール	7
⑦ 目標設定シート	10
II 具体的な研究開発内容報告	
① 開発単位 I 「リージョン探究」（高校 1 年生 4 月から 3 月）	12
② 開発単位 II 「グローバル探究」（現高校 2 年生 4 月から 12 月 ※プレ活動）	31
③ 開発単位 II 「グローバル探究」（高校 1 年生 1 月から）	61
④ 開発単位 III 「キャリア探究」（高校 2 年生 1 月から）	63
⑤ 開発単位 IV 「ミニ探究」授業開発	65
⑥ 2019 年度研究成果発表会	66
⑦ その他の取り組み	69
⑧ 来年度に向けて	93
III コンソーシアム運営会議報告	
① 第 1 回コンソーシアム運営会議	94
② 第 2 回コンソーシアム運営会議	95
③ 第 3 回コンソーシアム運営会議	96
④ 第 4 回コンソーシアム運営会議	97
IV 運営指導委員会報告	
① 第 1 回運営指導委員会	98
② 第 2 回運営指導委員会	102



和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる 「Key Girl」育成プログラム

「Key Girl」の資質

- ① 献身的性
- ② 興味・関心
- ③ 確かな知識
- ④ 課題発見および設定力
- ⑤ 課題解決力
- ⑥ 表現・発信力
- ⑦ 主体性
- ⑧ 多様性受容力

【キャリア探究】
「奉仕・貢献」「リノベーション」「グローバル」の3要素を絡め合わせて、自らの「ミッション」をみつけ、主体的に未来を切り拓いていく姿勢を育成

＜探究テーマ＞
「社会課題の解決に貢献する自己キャリアの探究」

オリエンテーション
有識者による講演
自己理解のための
ラーニングジョブ
キャリアアランニング
学年発表会



【グローバル探究】

世界に目を向け、世界を学び、グローバルな視野を持って地域にフィードバックする力を育成

＜探究テーマ＞
「世界の抱える課題」
教育 福祉 女性 環境



【リノベーション探究】
社会課題に対する当事者意識と地域の未来への責任感を醸成

オリエンテーション
課題設定
国内フィールドワーク(選抜式)
成果発表会



1 年生

＜探究テーマ＞
「地域の抱える課題」

基礎講座
課題選択
フィールドワーク
ポスターセッション
成果発表会



自己研鑽
自己肯定
自己犠牲と奉仕
自己肯定
【和歌山信愛のカトリック教育】

【和歌山県の現状】

- ・ 18歳人口の流出による人口減少
- ・ 超高齢化社会 (2060年には現役一人が老人一人を支える)
- ・ 地域産業の衰退

【「ミニ探究」授業開発】

- ・ 各教科における探究の手法の開発
- ・ 本事業との効果的な関わりをふまえたカリキュラムやイベント

【英語運用能力向上プロジェクト】

- ・ 英語で学ぶ授業開発
- ・ アジア高校生架け橋プロジェクト
- ・ 海外語学研修
- ・ Advanced Communication Program
- ・ オンライン英会話

海外交流アドバイザー 地域協働学習実施支援員

【コンソーシアム】



I 研究開発の概要

① 研究開発の概要図

② 研究開発の概要

指定期間	ふりがな	わかやましんあいちゅうがっこうこうとうがっこう				②所在都道府県	和歌山県
2019～2021	①学校名	和歌山信愛中学校高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計		
普通科	231	263	248		742	全日制普通科の女子校。1学年は8学級。医進・特進・学際 of 3コース制。中高で1043名。年次進行で全生徒を対象とする。	
(中学部)	104	100	97		301		
⑥研究開発構想名	和歌山発！地域の未来を拓く鍵となる「Key Girl」育成プログラム						
⑦研究開発の概要	地域の抱える課題を最善の解で解決に導きたいと考え、主体的に行動できる女性（Key Girl）を育成するため、「リージョン」「グローバル」「キャリア」をテーマとした探究学習プログラムを、コンソーシアム参加機関と協働しながら開発・実践する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>若く有能な人材が都市部へと流出し続けることで、少子高齢化が加速し、様々な社会課題に悩まされるようになった和歌山県において、カトリック教育を通して己の利益に固執しない清廉さと他者の心に寄り添い、奉仕・貢献する心を身につけた本学生徒が、地域の未来を憂うコンソーシアム参加機関からの全面的支援を受け、3つの探究学習プログラムを通してグローバルな視点も有しながら、地域の未来のために主体的に行動できる女性へと育成することを目的とする。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>現状①本学のある和歌山県は、急速に少子高齢化が進み、このままでは2060年度には現役世代1人が1人の高齢者を支えるという社会構造となり、税収の減少などから行政サービス、医療、交通など生活を支える機能の維持が困難になると予測されている。そのため、次世代を担う高校生の主体的な関わりが強く求められている。</p> <p>②上記のような状態を招いたのは、30年近くに渡り和歌山県の高校卒業者の県外大学進学率が90%近くで全国1位という状態であることが大きく関係している。地域の高等学校は有名大学への進学を競い、保護者世代も地域の未来に対して悲観的な印象を持っているのか、大都市圏にある偏差値の高い大学へ進学させることが最大の目的となっている。</p> <p>③本学は建学よりカトリックの理念による人間教育に邁進してきた。1990年代からは②の影響を受け、英語教育・理系科目の充実・二人三脚の指導が導入され、めざましい進学実績の伸びへとつなげたものの、その指導が生徒の能動的な学びを奪い、内向きの状態を招くことになってしまった。そこで、近年になって探究学習を導入したところ、生徒たちの中に主体的に将来を切り拓こうとする姿勢が見られたり、様々な外部のプログラムにチャレンジしようとしたりするなど、明らかな変容が見られはじめた。</p> <p>仮説①【地域】地域の様々な機関がコンソーシアムを構成し、本学生徒と協働して、地域に貢献する人材を育成することは本地域に大きな影響を与え、産学官と地域住民とが一体となって、地域の抱える課題を解決しようとする動きへと広がりを見せる。また、これまで地域に貢献する人材の育成には関心が薄かった周辺の高等学校も地域協働推進連携校へと名乗りをあげる。</p> <p>仮説②【生徒】本事業の各プログラムを通して、課題解決力や表現・発信力、主体性などの各種能力を身につけるとともに、地域の未来のために尽力する人々との協働の経験から地元との「絆」が結ばれ、将来何らかの形で地域の未来のために奉仕・貢献したいという思いを抱くようになる。</p>					

⑧- 2 具 体 的 内 容	<p>(1) 地域との協働による探究的な学びを実現する学習の実施計画</p> <p>地域課題に取り組む「リージョン探究」、グローバルな社会課題に取り組む「グローバル探究」、これまでの探究活動の成果を踏まえ、自らの生き方を考える「キャリア探究」の3つの探究プログラムを設定し、下記のように展開する。</p> <p>I 「リージョン探究」（高校1年生1学期～3学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、6つ（経済・医療・行政・産業・農業・林業）の地域課題の中から1つを選んで探究学習を行い、地域課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成するとともに、探究活動の基礎的な手法を身につける。 なお、本プログラムでは、クラスを越えてグループを編成し、「多様性受容力」と「表現・発信力」の育成を目指す。また、課題の設定は担当講師が行う。</p> <p>II 「グローバル探究」（高校1年生3学期～高校2年生3学期） コンソーシアム参加機関の支援のもと、「SDGs」の中から本学と関連の深い4つ（教育・福祉・女性・環境）のグローバル課題の中から1つを選んで探究学習を行い、グローバルな視野を有した上で、地域にフィードバックする手法を身につける。 なお、本プログラムでは、課題設定や国内フィールドワークの作成を生徒自身が行う挑戦的な形をとることによって、「課題解決力」だけでなく「課題設定力」、困難に負けない「主体性」、交渉を成功に導く「表現・発信力」等を育成する。</p> <p>III 「キャリア探究」（高校2年生3学期～高校3年生2学期） カトリックの精神を土台とし、I・IIのプログラムを経て成長した生徒たちには、今後予測される大きな社会構造の変化に対して受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながら未来を切り拓いていく姿勢が求められる。「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の3要素を関連させながら、自らの「ミッション」を見つけた上で、キャリアプランニングを行う。 なお、本プログラムは、個人による探究学習とするが、ディスカッション等を通して、他者から刺激を受けることで、「深い学び」を実現させる。</p> <p>※ 各活動期間が重複しているが、その期間を利用し、コンソーシアム参加機関との実践を伴う発展的な活動の実現を目指す。また、2年次には、「リージョン探究」の成果を「グローバル探究」の学びで改善しながら各種の外部コンテストに応募する。</p> <p>(2) カリキュラム・マネジメントの推進体制</p> <p>本事業で育成を目指す人材像を全教職員と生徒が理解・共有した上で「総合的な探究の時間」を用いて行う本事業の学びと各教科における学びとが、目標の達成に向けて効果的であるかを、カリキュラム検討会議を実施して改善する。なお、指定終了直前の会議では、本事業の1期生の代表を本会議に参加させ、生徒の意見も反映させる。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等</p> <p>「総合的な探究の時間」を2単位（1単位増）とし、LHRと併用しながら運用する。</p>
⑨ そ の 他 特 記 事 項	<p>(1) その他の取り組み（グローバル型として）</p> <p>I 各教員による「ミニ探究」授業の開発 本事業による探究学習を補完・発展させるものとして、各教員がミニ探究授業を開発・実践する。また、教科会議の振り返りを通して、カリキュラム検討会議を実施する。</p> <p>II 「カンボジア研修」の実施 グローバル型の本事業におけるリーダー研修として実施する。本学管理機関の共同体として、カンボジアの地方で教育支援活動を行うシスターを訪問し、ボランティア活動を行うことで「学ぶことへの意識改革」「自己のキャリアに対する意識改革」を促す。</p> <p>III 「英語運用能力向上プロジェクト」</p> <p>① 「英語で学ぶ」授業開発。各教科の教員と英語科教員とが協働し、英語を学ぶのではなく、英語で学ぶ授業を共創する。</p> <p>② 「アジア高校生架け橋プロジェクト」2期生（1名）を受け入れる。</p> <p>③ 「海外語学研修」の実施（2019年度は、カナダとオーストラリア）</p> <p>④ 「Advanced Communication Program」（中学3年生は全員。高校生は希望者で実施） 海外の大学生を招き、4泊5日の短期集中型プログラムを展開する。</p> <p>⑤ タブレット端末を用いた「オンライン英会話授業」の実施。（2019年度新規実施） ※上記の取り組みを通して、卒業段階で7割の生徒をCEFRのB1以上とする。</p>

③ 育成を目指す人材像

1 「Key Girl」とは、

- ・人と人を繋ぐキーパーソン
- ・地域の未来を拓く鍵となり
- ・和歌山県（紀伊）にキャンパスを構える本学に通う、女子高校生

2 資質

- ①献身性 ②興味・関心 ③確かな知識 ④課題発見および設定力
- ⑤課題解決力 ⑥表現・発信力 ⑦主体性 ⑧多様性受容力

④ 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

機関名	機関の代表者名
和歌山県	知事 仁坂 吉伸
和歌山市教育委員会	教育長 富松 淳
みなべ町	町長 小谷 芳正
公立大学法人和歌山県立医科大学	理事長・学長 宮下 和久
国立大学法人和歌山大学経済学部	学部長 藤永 博
学校法人和歌山信愛大学	※1 副学長 大山 輝光
一般社団法人女性と地域活性推進機構	代表理事 堀内 智子
国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川	会長 黒田 美智子
学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校（推進校）	※2 副校長 紙岡 智
学校法人和歌山信愛女学院（管理機関）	理事長 森田 登志子

※1 管理機関の理事長が大学の学長を兼任しているため、代表を副学長とする。

※2 管理機関の理事長が推進校の校長を兼任しているため、代表を副校長とする

⑤ 海外交流アドバイザー（グローバル型のみ）・地域協働学習実施支援員

・海外交流アドバイザー

氏名	所属・職
Sr.橋本 進子	ショファイユの幼きイエズス修道会カンボジアカンポット共同体
伊東 邦将	HAPPY SMILE TOUR CEO

※ 海外研修旅行（カンボジア）での現地研修プログラムの作成を担当し、1年間の活動に対して謝金で対応。

・地域協働学習実施支援員

氏名	所属・職
柳岡 克己	学校法人和歌山信愛女学院 学監

※ 本事業の担当として、コンソーシアム参加機関との連絡、調整を担当し、管理機関において雇用する。

⑥ 3カ年の実施内容、実施方法及びスケジュール

1 2019年度（指定1年目）

重点実施項目

- 高校1年生「リージョン探究」の完全実施
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究基礎」を改変した「リージョン探究」の全活動を実施する。

実施項目

- 高校2年生「グローバル探究」の一部実施と開発
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究発展Ⅰ」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ 国内フィールドワーク、カンボジアフィールドワークを実施し、次年度の実施に向けて研修内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ カナダ修学旅行で実施していたグローバルインタビューが、イタリア修学旅行（2019年度から行き先が変更）でも実施可能であるかを模索する。
 - ・ 必要な評価基準（ループリック）を策定する。
- 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材開発
 - ・ 今後の基準となるモデル授業の指導案の作成と実践を行い、その後、評価。改善を行う。
- 各教科における「ミニ探究」授業の開発・実践
 - ・ 全教員が通常の授業において「探究」の要素を含んだ1コマを開発し、実践する。
 - ・ 実施した授業は、教科会議で共有する。さらに教科主任会議において、「総合的な探究の時間」に実施する本事業の進行と連携し、大きな効果をあげることができるようカリキュラムマネジメントを実施する。
- その他
 - ・ 生徒・教員・保護者・コンソーシアム参加機関で、本事業の内容、成長目標を理解・共有する。
 - ・ 高校3年生「キャリア探究」の実施に向けて環境整備を行う。
 - ・ 強い興味・関心と深い学びを生徒たちに生じさせるために、学校の特性・課題研究の内容・海外研修の渡航地等で共通性の高い他校と合同研修会の実施を模索する。
 - ・ 各取り組みの成果をいかに蓄積していくかを模索する。

2 2020年度（指定2年目）

重点実施項目

- 高校2年生「グローバル探究」の完全実施
 - ・ 前年度部分実施を踏まえ、改善の上、実施する
 - ・ 国内フィールドワーク・海外フィールドワークは昨年度の取り組みを踏まえ、改善の上実施する。なお、海外交流アドバイザーとともにその妥当性と効果を検証し、更なる改善を行う。

実施項目

- 高校3年生「キャリア探究」の一部実施と開発
 - ・ 2018年度までのSGHアソシエイトプログラム「探究発展II」を改変し、次年度の完全実施に向けて、内容の妥当性・効果等を検証する。
 - ・ ジェネリックスキルを客観的に測定するため、外部業者の測定ツールを利用する。
 - ・ 必要な評価基準（ループリック）を策定する。
- 各教科による「ミニ探究」授業の開発・実践およびカリキュラムマネジメント
 - ・ 前年度の反省を踏まえ、実施した「ミニ探究」授業を改善および更なる新規実施を行う。探究活動の評価基準・方法については、各教科で策定を行う。
 - ・ 各教科の教科会議でこれまで実施してきた「ミニ探究」の授業と「総合的な探究の時間」で実施する本事業との連携を踏まえ、最大限の効果が起こるような授業配置を行い、教科主任会議にて共有・検討する。
- 「英語で学ぶ」授業の指導法および教材の開発
 - ・ アジア高校生架け橋プロジェクト第3期生が在籍するクラスを中心に、前年度のモデル授業をもとに、さらに拡大、実施する。
- 英語外部検定（GTEC等）における目標スコアの設定
 - ・ 過去2カ年のGTECの結果を踏まえ、英語科を中心にコースごとの目標スコアを設定する。
- 「合同カンボジア研修研究会（仮称）」を幹事校として開催
 - ・ 地域協働事業（グローバル型）およびSGH等でカンボジアをフィールドとして海外研修を実施する学校を招き、それぞれの学びを共有するだけでなく、さらに深化させるための会を企画・実施する。

2 2021年度（指定3年目）

重点実施項目

- 高校3年生「キャリア探究」の完全実施
 - ・ 前年度の部分実施を踏まえ、改善の上実践する。
- 研究成果最終発表会の実施
 - ・ 本事業の成果を地域や他校に普及するために、外部施設を借りて発表会を実施する。
- 本事業の研究完了報告書の作成
 - ・ 本年度は本事業1期生の卒業年度にあたるため、3年間の事業成果を総括の上、取りまとめる。
 - ・ 講評可能な部分に関しては本学HP上に公開し、事業普及のために貢献する。
- 指定終了後の取り組みについて
 - ・ 指定終了後の2022年度も本申請内容を継続できるような体制の構築を模索する。

実施項目

- 各教科による「ミニ探究」授業の開発・実践およびカリキュラムマネジメント

- ・ 前年度の反省を踏まえ、実施した「ミニ探究」授業を改善および更なる新規実施を行う。
 - ・ 各教科の教科会議でこれまで実施してきた「ミニ探究」の授業と「総合的な探究の時間」で実施する本事業との連携を踏まえ、最大限の効果が出るような授業配置を行い、教科主任会議にて共有・検討する。
 - ・ これまでの取り組みを踏まえ、次年度に控えた年次進行による次期学習指導要領へのスムーズな移行に向け、本学独自のカリキュラム作成を完成させ、学校、保護者、生徒に周知徹底を行う。
- 「英語で学ぶ」授業の更なる拡大
 - ・ 高校全クラスにおいて1ヶ月に1度「英語で学ぶ」授業を実践する。
 - 英語外部検定（GTEC等）について
 - ・ 前年度設定した英語外部検定の目標スコアの達成度合いを確認の上、英語に対する学びのモチベーションの向上も含めた指導方法の改善を行う。同時に目標スコアの適宜修正を加える。

（参考）2022年度～（指定外1年目以降）

重点実施項目

- 本申請内容の本校予算（管理機関支援）による運営
 - ・ 地域協働推進校として指定期間と変わらない運営を実施する。
- 文部科学省による本学事業に対する評価の精査
 - ・ 文部科学省による事業評価を受け、一連の研究開発について、場合によってはその内容を抜本的に見直し、より成果の見込まれる手法へと改善し、実践を継続する。

実施項目

- 次期学習指導要領に基づく指導の実践
 - ・ 次期学習指導要領への移行期間が終了し、本年度から年次進行で新しい学習指導要領のもとでの教育が実施される。編成した本学独自のカリキュラムを実践しながらも評価・改善を繰り返すことで、さらに質の高いカリキュラムを練り上げていく。
 - ・ これまでの地域協働推進校としての活動成果を十分に発揮し、地域の高等学校を牽引する存在となる。



⑦ 目標設定シート

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）			732	750	750
本事業対象生徒数			485	750	750
本事業対象外生徒数			247	0	0

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）					
	2017年度	2018年度	2019年度	備考	目標値(2021年度)
a(1)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 推進校以外の機関が実施する課題探究プログラムに自主的に参加する生徒の数			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：名 250 -
	本事業対象生徒：		X		
	本事業対象生徒以外：	38	52		
目標設定の考え方： 高校3年生は難しいが、高校1・2年の半数が自主的に参加してほしいと考えて算出した					
a(2)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 地域の団体が主催するシンポジウム等に自主的に参加する生徒の数			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：名 250 -
	本事業対象生徒：		X		
	本事業対象生徒以外：	-	32		
目標設定の考え方： 高校3年生は難しいが、高校1・2年の半数が自主的に参加してほしいと考えて算出した					
a(3)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 地域の団体等が主催するイベントのボランティアなどの社会奉仕活動に参加する生徒の数			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：名 250 -
	本事業対象生徒：		X		
	本事業対象生徒以外：	-	83		
目標設定の考え方： 高校3年生は難しいが、高校1・2年の半数が自主的に参加してほしいと考えて算出した					
a(4)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) ローカルおよびグローバルな社会課題に関する公益性の高い大会に自主的に参加する生徒の数			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：名 350 -
	本事業対象生徒：		X		
	本事業対象生徒以外：	73	115		
目標設定の考え方： 開発単位Ⅰ・Ⅱの成果を用い、現状以上に積極的に参加することを期待して算出した					
a(5)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 視野や見識を広げるため、自主的に留学及び海外研修に応募・参加する生徒の人数			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：名 70 -
	本事業対象生徒：		X		
	本事業対象生徒以外：	23	38		
目標設定の考え方： トビタテ留学JAPAN、カンボジア海外研修など毎年応募・参加者が増えていることを考えて算出した					
b(1)	(卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業段階で、将来地元には戻らないかもしれないが何らかの形で地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合			「リージョン探究」「グローバル探究」終了後のアンケート結果から算出した。本年度の高校3年生は測定できず。	単位：% 90 -
	本事業対象生徒：		参考 高1高2の60%		
	本事業対象生徒以外：	-	30		
目標設定の考え方： 本事業を通して、全ての生徒に地元の未来に貢献する気持ちを全員に持ってほしいと考え算出した					
b(2)	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業段階で、将来地元に戻り地元の未来のために貢献したいと考える生徒の割合			新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため測定できず。	単位：% 40 -
	本事業対象生徒：		-		
	本事業対象生徒以外：	-	10		
目標設定の考え方： 本事業を通して、将来多くの生徒に地元で働いてほしいと考え算出した					
b(3)	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校卒業段階で自宅から通学できる地元の大学や専門学校に進学する生徒の割合			和歌山信愛大学10名、和歌山信愛短期大学15名、和歌山県立医科大学3名など88人が地元の大学に進学する。本管理機関が昨年度開学した和歌山信愛大学の果たす役割が大きい。	単位：% 30 -
	本事業対象生徒：		-		
	本事業対象生徒以外：	17	22		
目標設定の考え方： 本事業を通して、地元の大学に通うという選択肢を持つようになると考え算出した。					
b(4)	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 高校在学中に、何らかのインターンシップを経験した生徒の割合			「グローバル探究」における「自分で創るフィールドワーク」はインターンシップの形をとっており、16事業所全41名が参加したため。	単位：% 35 -
	本事業対象生徒：		8		
	本事業対象生徒以外：	1	1		
目標設定の考え方： コンソーシアムが高校生対象に作成するインターンシップのwebシステムが運用されると考え算出した					
b(5)	(高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標) 大学卒業段階で、地域の未来のために貢献できると感じる職業に就く生徒の割合 ※2026年度			現状では測定ができなため。	単位：% 60 -
	本事業対象生徒：		-		
	本事業対象生徒以外：	-	-		
目標設定の考え方： 本事業の効果が大学卒業後も継続していると考え算出した					
c	(その他本構想における取組の達成目標) 高校卒業段階における4技能の総合英語力がCEFRでB1以上の生徒の割合			今年度12月実施のGTECの結果から算出。高1では9名、高2では27名がB1以上である。	単位：% 70 -
	本事業対象生徒：		参考 高14% 高2 10%		
	本事業対象生徒以外：	-	24		
目標設定の考え方： 本事業を通して、留学を通してグローバルな視野を獲得したいと考える生徒が増えると考え算出した					

2. 地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）						
		2017年度	2018年度	2019年度	備考	目標値(2022年度)
a(1)	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				12月定例職員会議においてカリキュラム検討の会議を実施した。	単位： 回 2
	教育改革推進事業運営委員会の主催で全教員が参加するカリキュラム検討会議の実施回数	-	0	1		
目標設定の考え方： 運営指導委員会の指導・助言を反映させるため、運営指導委員会後に開催するため。						
a(2)	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				今年度は「ミニ探究」授業開発の進捗状況がよくなかったため実施することができなかった。	単位： 回 8
	開発単位Ⅳ「ミニ探究」の充実および開発教材の情報を共有するための教科主任会議の回数	-	0	0		
目標設定の考え方： 「ミニ探究」は5月から開始し、8・12・3月は実施しないことを考えて算出した。						
a(3)	(地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				9月27日（土）に英語・数学・宗教の3教科で研究授業を行った。	単位： 回 1
	研究授業の実施回数（年間1回 3教科）	-	1	1		
目標設定の考え方： 研究授業は現行通りとするが、「ミニ探究」授業は日常的に参観し、学び合える環境を作る						
b(1)	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				「リージョン探究」のポスターセッション、最終発表会、「グローバル探究」のポスターセッション、最終発表会、さらに今年度から研究成果発表会を実施した。	単位： 回 5
	各開発単位Ⅰ・Ⅱおよび成果発表会の公開形式の発表会の実施回数	-	2	5		
目標設定の考え方： 開発単位Ⅰ・Ⅱはポスターセッションと最終発表会の2回ずつと成果発表会の1回で計5回とした						
b(2)	(普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				2019年度のHP更新は7月3回、8月7回、9月2回、10月1回、12月13回、1月4回、2月3回、3月1回、計34回である。本事業のwebページが7月に完成したことが影響し、昨年よりも少なくなっている。	単位： 回 50
	本学HP上で本事業の活動報告を行う回数	-	43	34		
目標設定の考え方： 現SGHアソシエイトプログラムにおける2018年の活動報告の回数をもとに算出した。						
c	(その他本構想における取組の具体的指標)				現状、地域協働推進連携校に申し出る学校はない。	単位： 校 2
	コンソーシアム参加機関における地域協働推進連携校の数	0	0	0		
目標設定の考え方： 本事業を通して、地域の学校が本コンソーシアムの活動に賛同してくれると考え算出した						

3. 地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
		2017年度	2018年度	2019年度	備考	目標値(2022年度)
a	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				今年度は編成したコンソーシアムの構成団体に変化はなかった。	単位： 団体 15
	コンソーシアムの構成団体数	-	(10)	10		
目標設定の考え方： 本事業を継続することで、連携校が2校・企業等が3団体増えると仮定して算出した						
b	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				「リージョン探究」ポスターセッション21名 「グローバル探究」ポスターセッション26名 などを合計して算出した。	単位： 人 のべ200
	地域課題研究又は発展的な実践に協働する地域の外部人材の参画状況	-	72	153		
目標設定の考え方： 本事業のプログラムおよび各発表会等への参加を依頼することを踏まえて算出した						
c	(地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標)				年間4回実施する予定であったが、コロナウイルス感染拡大防止の観点から3月開催分を中止としたため。	単位： 回 4
	コンソーシアムの活動回数	0	0	3		
目標設定の考え方： 年間で前年度反省・新規参入紹介1回、カリキュラム検討・助言2回、成果報告1回と考え算出した						
d	(その他本構想における取組の具体的指標)				コンソーシアム構成団体の一つ和歌山県主催による「高校生のための未来塾」が年間5回、女性と地域活性推進機構がシンポジウムを1回、国際ソロブチミスト和歌山紀ノ川がフォーラムを1回開催したため。	単位： 回 5
	コンソーシアム参加機関の協働もしくは単独の取り組みとして地域の高校生がその未来に貢献したいと感じる講演会を開催する	0	0	7		
目標設定の考え方： 本学生徒の変容を見たコンソーシアム参加機関が他の高校生を巻き込むことを考え算出した						
e	(その他本構想における取組の具体的指標)				現状、このシステムを構築する意義を理解してもらおうことができていないため。	単位： 個 1
	コンソーシアム参加機関が中心となり、高校生に地場産業のインターンシップ体験を提供するwebシステムを構築する	0	0	0		
目標設定の考え方： 体験を通して、高校生に地元で働くという生き方を提案することが大切だと考え算出した						

II 具体的な研究開発内容報告

① 開発単位 I 「リージョン探究」(高校1年生4月から)

1 目的

地元和歌山の抱える地域課題と向き合うことによって、社会課題に対する当事者意識、地域の未来への責任感を醸成し、探究活動の基礎的な手法を身につけることを目的とする。地域の未来のために尽力するそれぞれの立場の人たちと協働するという事で「絆」が結ばれると同時に、人と人をつなぐ「Key」パーソンとしての資質が育成される。また、自己の利益だけを考えたキャリア形成ではなく、将来地元のために奉仕・貢献したいという気持ちが育まれる。

2 内容

地域の「経済」「医療」「産業」「行政」「農業」「林業」という6つの分野の課題をテーマに、高校1年生を6つのグループに分けて探究学習を実施する。コンソーシアム参加機関から派遣された講師が提示した課題についてグループディスカッション、フィールドワーク、中間発表等の活動を経て、最終発表会において、最善の解決策を提案する。本探究プログラムは、グループによる協働活動とし、コース・クラスの垣根を越えたグループ編成を行う。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・⑤・⑥・⑦・⑧

4 概要(実践)

i 年間実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容	
1	1	4月11日(木)	1	新入生研修合宿にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス(内進生)	
			2	「信愛フェスタに企画を出そう」グループワーク	
			1	「信愛フェスタに企画を出そう」発表会	
			4月16日(月)	1	新入生研修合宿にて 「地域協働事業」および「リージョン探究」ガイダンス(高入生)
	2	4月22日(月)	2	プレ活動(ブレインストーミング練習)	
	3	5月15日(水)	2	「リージョン探究」オリエンテーション	
	4	5月29日(水)	2	グループワーク① アイスブレイク	
	5	6月19日(水)	2	グループワーク② 解決策のアイデア出し	
	6	7月10日(水)	2	グループワーク③ フィールドワークに向けて	
	7	7月19日(金)	6	フィールドワーク 「医療」… 和歌山県立医科大学、すさみ病院 「経済」… 田辺市役所等 「産業」… みなべ町うめ振興館等 「行政」… 明石市役所等 「農業」… 桃山町、有田川町の農業関連施設等 「林業」… 田辺市林業現場等	
	8	7月20日(土)	1	グループワーク④ フィールドワークの振り返り	

学期	回	月日	コマ数	内容
2	9	9月18日(水)	1	グループワーク⑤ ポスターセッションに向けて
	10	9月25日(水)	1	グループワーク⑥ ポスターセッションに向けて
	11	10月16日(水)	2	グループワーク⑦ ポスターセッションに向けて
	12	10月30日(水)	2	ポスターセッション
	13	11月6日(水)	2	グループワーク⑧ 最終発表会に向けて
	14	12月13日(金)	2	最終発表会1日目
	15	12月14日(土)	2	最終発表会2日目
	16	12月16日(月)	1	「リージョン探究」の活動振り返り、評価活動
3	17	2月12日(水)	3	研究成果発表会(「グローバル探究」と合同)

ii 担当講師および提示課題

医療：和歌山県立医科大学 上野雅巳先生

〔課題〕医療の地域格差をどのようにして解決するか。

医療の格差を埋めるために生活習慣病をどのように克服するか。

経済：和歌山大学 足立基浩先生

〔課題〕回遊性を意識した上で中心市街地にどのように人を呼ぶか。

産業：みなべ町うめ課 中早良太先生

〔課題〕梅の消費低迷・梅栽培の後継者の育成・耕作放棄地、鳥獣被害などの課題をどう解決するか。

行政：和歌山市役所 建島克佳先生

〔課題〕急激な人口減少に歯止めをかけるような都市のあり方とはどのようなものか。

農業：和歌山県庁 塩路宏明先生

〔課題〕いかにして和歌山県産の農産物の効果的なPR化・ブランド化(加工を含める)を行うか。

林業：和歌山県庁 小川泰典先生

〔課題〕林業は「育てる時代」から「伐って使う時代」に移行している。暮らしの中でもっと紀州材を使うにはどうしたらよいか



5 評価

i 評価方法

各担当講師から提示された地域の抱える課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究学習に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・B（改善を必要とする）・C（努力を必要とする）」の4段階ルーブリック評価表（表1）を用いて自己評価および相互評価、そして担当教員からの評価を行った。また、ポスターセッションおよび最終発表会における発表および資料に関しては、アドバイスシートに付属したルーブリック評価表（表2）を用いて、生徒・教員・一般参加者からの評価を行った。

ii ルーブリック評価表

（表1）

	姿勢		探究	コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題解決力	表現・発信力（他者へ）	多様性受容力（他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、活動を通して進んで地域の未来のために貢献しようとする強い意志が感じられた。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、強い好奇心とともに深い探究が行われ、未来の地域のあり方に強い興味関心を持つようになった。	充実した調査を通して得た資料やデータを踏まえ、十分な論拠とともに独創的な解決策を展開することができた。	他者に対して様々な方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観が異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげることができた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来地域の未来のために貢献したいという思いを抱くに至った。	地域の方々の危機意識からスタートした活動であるが、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、未来の地域のあり方に興味関心を持つようになった。	熱心な調査を通して得た資料やデータを解釈して、解決策を展開することができたが、ありふれたものに留まってしまう。	他者に対して常に分かりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、探究活動がより意義あるものとなるように協働することができた。
B	与えられた自らの役割は果たしたが常に受動的で、地域の未来のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、積極的に探究活動に取り組むことができず、興味関心を広げることができなかった。	独自の解決策を展開しているが、調べた資料やデータ等を活用することができておらず、論拠に乏しいものとなってしまった。	他者に対して自らの思いを伝えようとする気持ちはあるものの、伝わらないもどかしさから感情的になる場面が多く見られた。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの考えを押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、地域の未来のために貢献することへの価値を全く見出すことができなかった。	地域の方々の危機意識からのスタートであったため、興味関心を持つ事柄を全く見出すことができず、探究活動を他のメンバーに任せきりであった。	調べた資料やデータ等をただ列挙しただけにとどまっておろ、その調査も質・量ともに十分なものは言えない。	そもそも他者に思いを伝えようとする気持ちに乏しい。もしくは他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、自分の考えに固執する、もしくは協力しあうことを放棄するなど協調性に欠けた。

（表2）

【発表】	
S	原稿を見ず、聞き手への配慮もなされ非常に聞き取りやすかった。
A	原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされ聞き取りやすかった。
B	原稿を見ながら、もしくは声が小さく聞き取りにくかった。
C	原稿を見ながら、かつ声も小さく聞き取りにくかった。
【内容】	
S	綿密な調査に基づき、独創性のある興味深い課題解決策を提示していた。
A	課題解決策の着眼点などに良さがああり、さらなる飛躍、発展を期待したい。
B	課題解決策が調査不足であったり、一般的なものであったりなど物足りなさが感じられた。
C	課題について調べたことをただ発表しているだけであった。

6 成果

本学が育成を目指す「Key Girl」に向けての第1段階として、概ね一定の成果を上げることができたと感じている。本開発単位では、探究活動の基本的な手法やポスターやパワーポイントなどのプレゼンテーション資料の作成、効果的なプレゼンテーションの方法などの基本的な力を養うと同時に、「Key Girl」の7つの資質の育成を目指した。特にルーブリック評価表を活動の最初に提示し、時折振り返りの機会を設けたことは効果的な手法であったと感じている。以下に、本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

i 資質①「献身性」

本学はカトリックミッションスクールであり、週に1コマ「宗教」という授業が設定されているだけでなく、年間を通して聖母祭、物故者追悼ミサ、クリスマスミサなどの各種宗教行事も多い。また、教室やトイレなどの学校施設を生徒たち自身が毎日清掃するという伝統もあり、日々の学校生活の中でも「献身性」が育まれている。そのような背景もあり、本開発単位終了後に実施したレポートからも「私はあまり積極的でないため、たくさんの意見を伝えることができなかつたけれど、グループのメンバーから私のちょっとしたような行動に助けられたと言われ、とても嬉しく感じました。私は人に頼りすぎたため、来年度はグループのメンバーのために、私にできることを見つけて率先して行動したいと思います」(行政)、「たとえ高校生でも、協力しながら地域のために貢献することは大切だと思った。私たちの解決策は大人から見たら大したものでもないし、実際に実施されることはないのかもしれないが、それでもこのような活動を通して、誰かのためになることをしていきたいと感じた」(経済)などと、本開発単位の内容と結びつけることができていることが分かる。

ii 資質②「興味・関心」

本開発単位終了後に実施したレポートには、「和歌山に住んでいるにもかかわらず、知らなかった事がたくさんあって、とても驚きました。こういう機会がなければ知ることもなかったと思うので良かったと思います」(医療)、「今まで和歌山がどんな状況になっているかなんて全く興味がなく、ほとんど何も知らない状況でした。でも、※ブラクリ丁のことをよく知ることができたし、こういうふうに変わればいいなという意見も持つことができました」(経済)などの意見が数多く見られ、本開発単位が「興味・関心」の向上に大きく貢献したことが分かる。

※ブラクリ丁 … 和歌山市内の中心市街地にある商店街。かつては多くの人で賑わっていたが、現在はシャッターが目立つ商店街となっている。

iii 資質③「確かな知識」

本開発単位終了後に実施したレポートには、「ニュース、新聞などでは、『森林の量が減っている、足りない』と言っているのだから、これから木の量を増やすためにどうするのか、などの課題を考えていくのだと思っていました。しかし、活動を始めてみると『和歌山の木をどのように使ってもらい、減らすのか』が課題になっていったので驚きました」(林業)、「ネットでも様々な情報を調べることができますが、実際に梅を育てている農家さんの話や、梅加工の工場見学・説明を通して、事前に調べていたこととはかなり異なっていたため、自分の目で見て、肌で感じ、耳で聞くことがいかに大切かということを学びました。特に、ネットの記事を読んだ時には、自分でも梅農家になれるのではないかと考えていたのですが、現実はそんなに甘いものではなく、目に見えない様々な作業があって初め

て梅の実ができるのだということを感じました。便利で簡単に検索できるインターネットに頼ってしまいがちですが、実際に現地を訪れて調査することは大切だと感じました」(産業)、「探究活動を通して、自分が知らないことの多さを感じました。今自分が快適に暮らせていると思っている和歌山市でも、現状を聞いたり調べたりすると問題がたくさんあるんだということを感じました。普段和歌山市の問題について考えることはほぼ無いので、身近だけど気づくことのない和歌山市の課題について考える機会を与えていただき、大変ながらも楽しく面白い活動ができました」(経済)などの意見が見られ、普段インターネットに頼っていることや、目を向けることがないため知らなかったことに気付くことで、「確かな知識」を持つことの重要性を認識していることが分かる。

iv 資質⑤「課題解決力」

本開発単位終了後に実施したレポートには、「地方創生をテーマに和歌山市の子育て支援について考えた。和歌山市の学童保育である若竹学級の利用日時や制度を変えることで、子育てしながら働きたい親にとってもっと良いものになるのではないかと考え、ポスターセッションまで沢山話し合いをした。ポスターセッションを終えて、『親目線ばかりでなく、若竹側、子ども側の立場にも立ってみるべきだ』という意見があった。その時私たちは、子育て支援を手厚くすることは親のためだけでなく、子どもや施設側のことも考えなければいけないんだと気付くことができた。その後、最終発表会に向けて、実際に市役所に行き、若竹側の考えを聞きに行ったり、出身の小学校に行って子どもにインタビューしたりしたので、ポスターセッションの時よりも発展した解決策を提案することができたと思う」(行政)、「私たちの班は、農家の減少をどのように食い止めるかという視点から解決策を考えましたが、他の班からは和歌山県の代表的な作物であるみかんの効能に注目し、『温泉みかん』という商品を作り出し、それを目玉にして農業を盛り上げようというアイデアが提案されました。今まで何気なく食べていたみかんですが、温めるとシロップで漬けた缶詰のみかんのように甘くなるそうです。普通に食べてみたいと思いました。きっと私たちと同じように考える人はたくさんいると思うので、お土産品として開発すれば、みかんの消費量が増えるだけでなく、観光客も増えるのではないかと思います。私も独創性のあるアイデアを思いつけるようになりたいと感じました」(農業)などと、課題解決力が向上するような取り組みができていると考えられる。

v 資質⑥「表現・発信力」

本開発単位終了後に実施したレポートには、「自分は人前で話すのが得意ではなく、どちらかと言えば消極的なタイプだと思います。しかし、このような機会をもらって少し変わったような気がしました。来年も新しい探究学習があるそうなので、今よりもさらに成長できるように頑張っていきたいです」(農業)、「発表の時には、つい台本に目を向けてしまって、自分の言葉でプレゼンすることができなかつたことを後悔している。もっと練習を重ねるべきだった」(医療)などの意見が見られた。本学はどちらかと言えば、本質的に大人しい生徒が多く、人前で発表することを苦手としている生徒が多い。しかし、このように発表の機会を複数回持つことで、比較的大人しい生徒でも前向きな思考を持つようになっていくことが伺える。

vi 資質⑦「主体性」

かつての本学の一番の弱点がこの「主体性」である。以前の本学は教員の「二人三脚」による指導によって大きく学力を伸ばすことに成功したが、反面その指導が生徒から「主体的な学び」を奪って

しまった。そこで、2015年度よりSGHアソシエイト校として探究活動に取り組みはじめたところ、生徒たちに「主体性」や「チャレンジ精神」といった点で変容が見られるようになってきた。その流れを汲んで開発単位を実施しているため、事後のレポートでも、「私たちは、紀州材で染め物を作るというアイデアを考えました。実際に染め物を作ってみると、より説得力がでるのではないかと考え、グループのメンバーで作ってみました。その行動を評価してもらえてとてもうれしかったです」（林業）、「今回のリージョン探究では普段出会うことのない問題について考えることができました。課題を自分ごととして捉えることや何かに取り組むことの大切さを感じるとともに、自分の物足りなさも感じたので、今回の反省を踏まえ、来年度の取り組みに反映させたいと思います」（医療）など、探究活動の中にアクションを盛り込む主体性や、次の探究活動へ向かう主体性などを感じることができるのは、本事業におけるとても喜ばしい成果だと言える。

vii 資質⑧「多様性受容力」

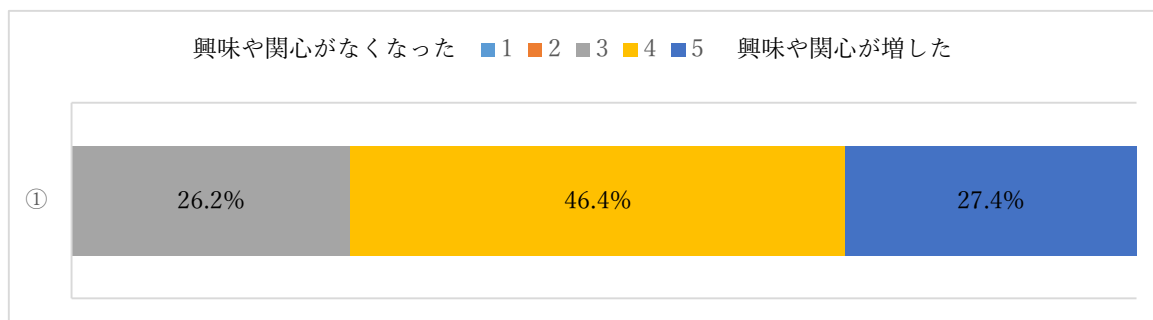
本開発単位の成果として意識しているのがこの力である。本学は、「医進」「特進」「学際」の3コース制で、これまでコース間の交流はあまりなかった。また、中学校から進級する「内進生」、高校から入学する「高入生」、全国大会レベルの運動部が所属するスポーツクラスと1つの学年の中に多様な生徒が在籍している。入学したばかりの高校1年生には、その意識はないが、学年の連帯感はこれまで弱かったように思う。そこで、本開発単位では、この環境を逆手にとり、コース、クラスの垣根を取り払って、希望する分野ごとで探究グループを編成することで、「多様性受容力」を伸ばそうと考えた。終了後のレポートでは、「班のメンバーがあまり積極的ではなかったため、テーマを決める時、解決策を決めていく時、パワーポイントを作成する際など、全て自分がやったと言っても過言ではなかった」（医療）というネガティブな意見も見られたが、この生徒はレポートの後半で「しかし、このような状態に陥ったのは、自らが他のメンバーに上手く呼びかけることができなかつたかもしれない。今までは仲のいい人としか関わってこなかったため、本当の意味での『協調性』を考える機会になったように思う」と前向きに考えることができている。また、「今回のリージョン探究で協力することはとても大切だと思いました。私が思った意見と違う意見を持った人が集まって、けれど違う意見を持っていたからこそ更に良い案が班の意見として出たのかなと思いました。色んな考え方を知れて面白かったです」（医療）というようなポジティブな意見も多数見られている。

7 事後アンケートの集約

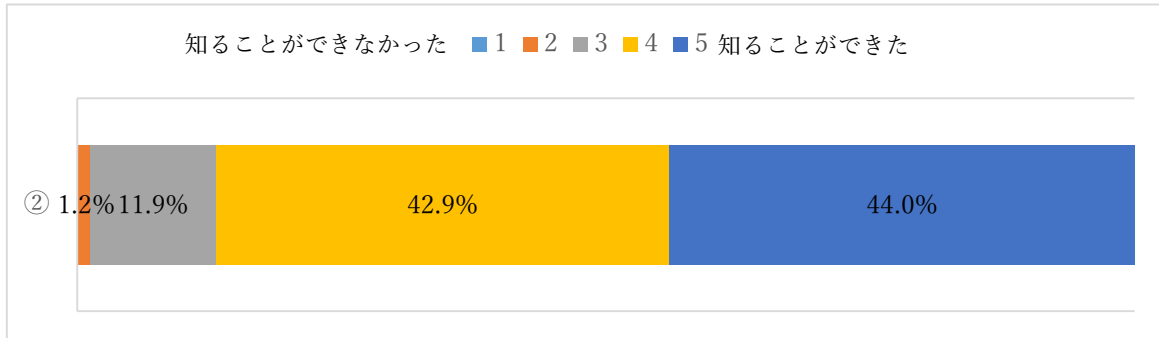
1年間の学びの効果を測定するため、アンケートを実施した。その結果を以下にまとめる。

○質問項目

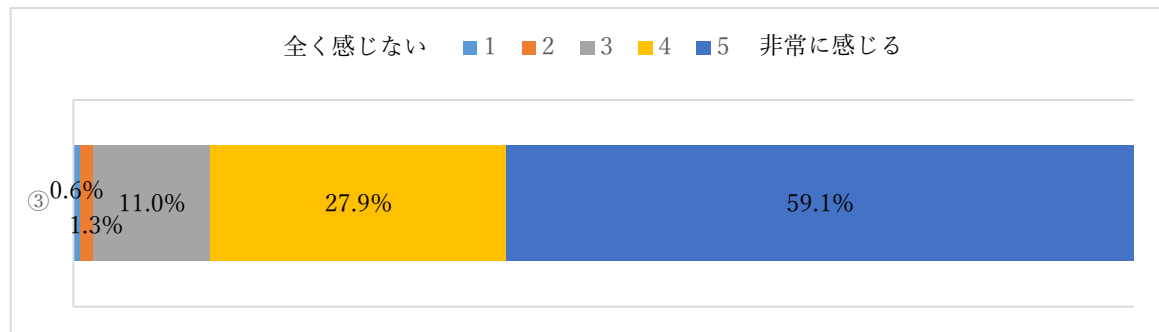
① 「リージョン探究」の学びを通して、「地域」に対する興味や関心はどのように変化しましたか。



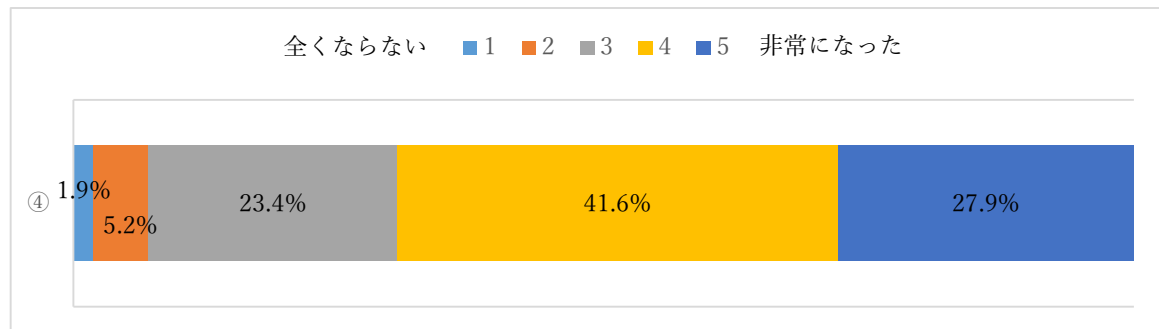
② 「リージョン探究」を通して、「地域」について深く知ることはできましたか。



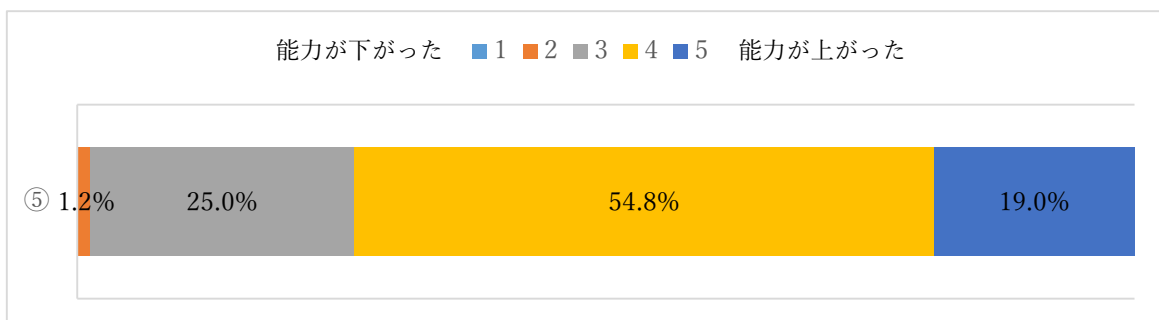
③ 「リージョン探究」を通して、他者と協働することの大切さを感じるようになりましたか。



④ 「リージョン探究」を通して、新しいことや難しいことにチャレンジしてみようという気持ちを持つことができるようになりましたか。



⑤ 「リージョン探究」を通して、「納得解」や「適正解」を導く能力はどのように変化したと感じていますか。



8 次年度以降への課題

本開発単位の運営を通して一定の成果を得たと感じたものの、同時に次年度以降に向けていくつかの課題も明らかになった。以下に、詳細を述べ、次年度以降の改善を目指したい。

i 生徒に対する本事業の内容の周知徹底不足

新年度に入り、新入生研修合宿の中で、本事業についてのガイダンスを実施した。社会の変容による学びの変容、本事業の背景、プログラム内容説明等を丁寧に行ったつもりではあったが、事後アンケートでは、探究活動を行う目的や理由がよく分からないという意見が見られた。1月に実施した「グローバル探究」のガイダンスで、当該学年にはもう一度説明を行い対応したが、次年度の高校1年生には、一度の説明では理解しきれないことを意識した上で対応したい。

ii 課題解決力に対する自己肯定感の低さ

「PDCAサイクル調査研究事業」におけるアンケートでも顕著に表れていたが、本学の生徒はカトリック教育の影響を受けているためか、よく言えば「謙虚」ということになるのだと思うが、「自己肯定感」が低い傾向にある。前述のアンケートにも現れているが、⑤の項目のような能力の伸長を問う項目になると、「5：能力が上がった」を選ぶ生徒が少なくなる。せっかく本開発単位に取り組みながらも「能力が上がった」ということを認めることができないのはとても残念なことである。その原因は定かではないが、自らをプラスの方向に評価することは他者から「傲慢」だと思われるという意識がすり込まれているような印象を受ける。自らを適切に評価することの大切さを伝えていく必要性を感じている。



湯上りに温泉みかん

農業 37班



1

和歌山の農業の問題点

- 和歌山のみかんはおいしい！！

しかし…



他県と比べて

知名度が低い！！！！



2

実は和歌山県は、、、

家族連れで行きたい温泉地ランキング

第一位をとっています



3

湯の峰温泉

- 和歌山県田辺市本宮町にある温泉地
- 約1800年前に発見された日本最古の温泉の一つ
- 川沿いに湯筒があり、温泉野菜が楽しめる



4



5

温泉みかんにすることで、、、

- みかんの白いすじまできれいにむける
- 薄皮もむきやすくなる
- 甘みをより一層感じられる



6

用意したもの

- みかん(皮付き) …4個
- 水…適量
- なべ



7

温泉みかんの作り方

- ①みかんを皮ごと熱湯で2分から5分ほど茹でる
- ②引き上げてむく
- ③氷水などで冷やす



完成!!

8

調理前

• 皮がざらざらしている



• つるつるになった

• 白い筋がのこっている



• 簡単に筋まできれいにむけた

• 少し酸味がある



• 甘みが増した
(缶詰のみかんのように)

9

加熱することで栄養は... ?

増える!!



温めることで、皮にもともとあった栄養が果肉に移る！

10

余ったミカンの皮は、、、？

近隣農家さんが使う肥料として

再利用!!!!



11

より食べやすく、おいしくすることで

→ たくさんの人に食べてもらい、
和歌山のみかんをより知ってもらえる！

さらに・・・

実際に温泉を訪れて、和歌山の魅力に気づいてもらえる！

-石二鳥

温泉みかんによって、
和歌山のみかんだけでなく、
和歌山のことも好きになってもらえる！！



12

今回使わせていただいた画像

Exciteニュース様より

「手早く剥けてゴミも散らからない本場・和歌山の“ミカンの剥き方”」

URL https://www.excite.co.jp/news/article/Heaaart_233211/

温泉部様より

「湯の峰温泉が人気の3つの理由！旅館や観光情報から

名物グルメ & お土産についても」 URL <https://onsenbu.net/28951>

どうぶつのこと様より

「これぞ冬の風物詩！みかんいっぱいカピバラ温泉でほっこり。」

URL <https://pandanocoto.com/article/1982>

13

Cookpad様より

「温泉みかん！みかん茹でちゃいました」

URL <https://cookpad.com/recipe/5517413>

まるまつ農園様より

URL <http://www.mm-farm.com/>

いずれも2019年12月10日最終アクセス

これらの方々の画像を使わせていただきました。

14

B&B i n 加太

経済 1班

1

「和歌山市の活性化」

■和歌山市の問題点

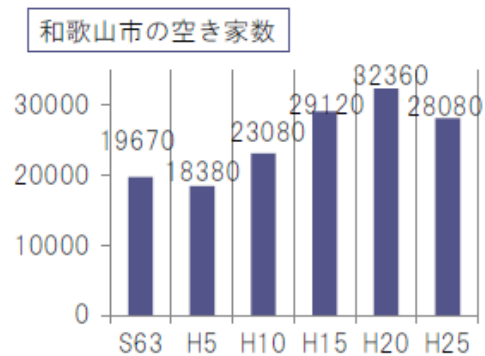
①市内への観光客・宿泊客が少ない

②空き家数の増加

全国→13.5%

和歌山県→18.1%

和歌山市→15.8%



2

考えられる原因

■市内への観光客の減少

- (1)地理的要因
- (2)市内に魅力が少ない



■空き家数の増加

- (1)人口・世帯数の減少
- (2)既存の住宅・建築物の老朽化

3

B&B in加太

■海上アスレチックパーク

- 関西に2カ所のみ
(竹野浜、琵琶湖)

■B&B

- 空き家を活用した宿泊施設



4

海上アスレチックパーク

- U.S.PARK



予算に合わせた設計・設置
運営面でのサポート
悪天候時などの撤去・保管

5

B&B

- 宿泊と朝食の料金のみで低価格
- 多くのB&Bは家族経営による小規模な宿泊施設
- 多くは住宅・民家をリフォームして営業している
- 近くの温泉との連携

6

費用

■海上アスレチック

→クラウドファンディング

■B & B

→空き家を活用した地域交流拠点等づくりに係る補助金

行政

7

DIY

■地域の方々

■メディア

■大学生などのボランティア

8

② 開発単位Ⅱ「グローバル探究」(高校2年生4月から ※現高校1年生のためのプレ活動)

1 目的

本学の目指す「Key Girl」の姿は、グローバルな視点を有しながらも地域の未来のために貢献できる人材である。「リージョン探究」では自らの住む地域にも多くの課題があることを知り、地域に対して「興味・関心」が育まれた。また、地域の方々との協働活動は「絆」となり、いつか地元に対して自らの持てる力を還元したいという郷土愛にも繋がっているはずである。しかし、自分さえよければいい、自分の身近なところだけがよければいいという考えのもとでは、一時的な解決はできても持続性はない。「世界」と「地域」とは相反するものではなく、世界に目を向け、世界の課題を学び、そこで獲得したグローバルな視点を用地、地域にフィードバックする力へと発展させる。

2 内容

グローバルな視点を獲得するために、SDGsの中から4つの分野を選び、その範囲の中で探究活動を実施する。2015年9月の国連サミットで採択された国連加盟193カ国が2030年までに達成する目標であるSDGsは、17の目標と169のターゲットから構成され、持続可能な社会を実現するために、地球上の誰一人も取り残さないことを誓ったものである。

本学の礎が明治初期に文明開化の陰で置き去りにされた人々に教育と福祉を提供した4人のフランス人シスターにあることから「教育(目標4:質の高い教育をみんなに)」、「福祉(目標1:貧困をなくそう、目標2:飢餓をゼロに、目標3:すべての人に健康と福祉を)」。また、本学がカトリックミッションの女子校であることから「女性(目標5:ジェンダー平等を実現しよう)」。さらに、ここまでのSGHアソシエイト活動で毎年行ってきたアンケートで環境問題をテーマに探究活動を行いたいという生徒からの要望が多かったことから「環境(目標7:エネルギーをみんなにそしてクリーンに、目標13:気候変動に具体的な対策を、目標14:海の豊かさを守ろう、目標15:陸の豊かさを守ろう)」。以上の4分野を「グローバル探究」のテーマとする。

なお、本開発単位においては、「リージョン探究」よりも難易度をあげるために、テーマは設定するものの、課題に関しては生徒が独自に設定することとする。また、原則グループでの探究活動を推奨するが、どうしてもこの課題でやりたいという場合は、個人での探究活動も可とした。

さらに、フィールドワークも「自分で創るフィールドワーク」と命名し、自分たちの設定した課題の解決のために必要なフィールドワーク先を自分たちで開拓し、交渉の上、インターンシップの形で受け入れを目指す。



3 「自分で創るフィールドワーク」

i 概要

「グローバル探究」における一つのチャレンジが「自分で創るフィールドワーク」である。今年度は、東京・大阪・和歌山の3カ所を想定し、2日間のインターンシップを通して調査活動を行うことにした。なお、それぞれのフィールドワークを設定する条件は以下の通りとした。

実施地	フィールドワーク受け入れ期間	備考
東京	8月6日（火）・7日（水）	ホテルから1時間程度で通えること。
		8月5日（月）から8月9日（木）の3泊4日で往復交通費、宿泊費は補助。
大阪	8月6日（火）・7日（水）	日帰りで実施。現地までの往復交通費は補助。
和歌山	夏期休暇中	左記の期間で2日間以上受け入れてもらうこと。交通費等の補助はなし。

ii 受け入れ事業先

生徒たち独自の交渉により、東京・大阪・和歌山の3カ所で計16の企業・団体・事業などからフィールドワーク受け入れの承認を受けた。

実施地	分野	事業所名
東京	教育	チエル株式会社
	女性	株式会社リブセンス
	環境	国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 多摩森林科学園
	環境	一般社団法人 プラスチック循環利用協会
大阪	福祉	CAPセンター・JAPAN
	教育	株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
	環境	パナソニック ホームズ株式会社
和歌山	教育	愛徳医療福祉センター カナの家
	福祉	子どもの生活支援ネットワーク こ・はうす こむすび塾
	福祉	中之島子ども食堂
	福祉	三信化工株式会社
	福祉	独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構和歌山支部 和歌山障害者職業センター
	福祉	社会福祉法人 真愛会みのり西庄園
	女性	日本赤十字社 和歌山医療センター
	女性	関西電力 大阪本社
	環境	和歌山市青岸清掃センター

4 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

5 概要（実践）

i 年間実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容
1	1	4月22日（月）	1	「リージョン探究」ガイダンス
				・SGHアソシエイト「探究発展I」からの変更
				・地域協働事業および「グローバル探究」の内容説明
	2	5月8日（水）	2	グループワーク①
				・探究グループの編成 ・探究テーマの決定
	3	6月19日（水）	2	グループワーク②
・探究活動の開始 ・フィールドワーク先の選定				
4	期末試験終了後	2	グループワーク③	
	7月16日（月）		※日程は、クラスによって異なる	
5	7月18日（木）	2	「自分で創るフィールドワーク」締め切り	
			「グローバル探究」特別講演	
			(株)ジャーマンインターナショナル代表取締役 ルース・マリー・ジャーマンさん	
夏期休暇（7月29日～8月22日）				「自分で創るフィールドワーク」実施
2	6	8月28日（水）	1	フィールドワーク成果共有会 ※1
				・フィールドワーク成功班（16班）による発表
	7	9月18日（水）	2	グループワーク④ 解決案の策定
	8	10月2日（水）	2	グループワーク⑤ ポスターセッションに向けて
	9	10月16日（水）	2	グループワーク⑥ ポスターセッションに向けて
	10	10月23日（水）	2	ポスターセッション
	11	11月6日（水）	2	グループワーク⑦ ポスターセッションの振り返り
	12	11月27日（水）	2	グループワーク⑧ 最終発表会に向けて
	12	12月13日（金）	2	最終発表会 1日目 ※2
	13	12月14日（土）	2	最終発表会 2日目 ※2
14	12月16日（月）	1	「グローバル探究」の活動振り返り、評価活動	
3	15	2月12日（水）	3	研究成果発表会
	16	2月13日（木）	1	地域協働事業（グローバル型）特別講演
				産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊 道子さん
17	3月13日（金）	1	研究成果オンライン発表会 ※3	

- ※1 「グローバル探究」の全63班のうち16班が受け入れ先を確保することができたため、フィールドワークを実施することができ、それぞれの学びを学年で共有した。
- ※2 最終発表会は、個人の探究を認めたことで、事前に想定していた班数よりも多い探究グループができてしまったため、体育館とホールの2カ所で同時開催とした。
- ※3 3月2日より新型コロナウイルス感染拡大予防による休校措置のため、実施できず。

ii 担当講師

今年度はプレ活動のため、各分野の講師はなし。クラス内でのグループ編成のため、担任2名が指導にあたる。

6 評価

i 評価方法

各探究グループにおいて設定したグローバル課題に対する「最善の解」の提案に向けて、主体的かつ協働的に探究活動に取り組んだ経緯をプログラム終了後に、「S（大変優れている）・A（優れている）・C（改善を必要とする）・D（努力を必要とする）」の4段階ループリック評価表（表1）を用いて自己評価および相互評価、そして担当教員からの評価を行った。また、ポスターセッションおよび最終発表会における発表および資料に関しては、アドバイスシートに付属したループリック評価表（表2）を用いて、生徒・教員・一般参加者からの評価を行った。

ii ループリック評価表

（表1）

	姿勢		探究		コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	表現力・発信力 （他者へ）	多様性受容力 （他者から）
S	グループのリーダー的存在として自らの役割や責任を果たすだけでなく、進んで他者や社会のために貢献しようとする意志が感じられた。	課題意識を持って活動をスタートし、強い好奇心とともに深い探究が行われたことで、関連する他の分野にも課題意識が広がった。	グローバル探究にふさわしい独自性に富んだ具体的な課題を設定することができた。	先行研究を踏まえ、十分な論拠とともに、独創的な考えを展開することができた。	他者に対してさまざまな方法・手段を駆使して分かりやすく伝えることができただけでなく、意見の異なる相手からも理解を得ることができた。	自らと考えや価値観の異なる人とも自分から積極的に交流し、自らにない価値観を受け入れるなど相互理解を通して質の高い成果につなげた。
A	グループの一員として自らの役割や責任を果たした経験から、将来他者や社会のために貢献したいという思いを抱くに至った。	課題意識を持って活動をスタートし、深い探究を行おうと積極的に取り組んだことで、さらに興味関心が広がった。	グローバル探究にふさわしい具体的な課題を設定することができた。	調べた資料やデータを解釈し、自らの考えを展開することができた。	他者に対して常にわかりやすく伝えようとし、意見の異なる相手からも理解を得ようと工夫することができた。	自らと考えや価値観の異なる人のことも尊重し、活動がより意義のあるものとなるように協力することができた。
B	与えられた自らの役割は果たすが主体的なものではなく、他者や社会のために貢献するという生き方に価値を見いだすことができなかった。	課題意識を持って活動をスタートしたにも関わらず、積極的な探究を行うことができず、興味関心を広げることができなかった。	グローバル探究にはふさわしいが、漠然とした課題設定となってしまった。	独自の考えを展開しているが、調べた資料やデータを活用できておらず論拠に乏しい。	他者に思いを伝えようとする気持ちはあるが、もどかしさから感情的になることが多かった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在に気付くことはできたが、自らの意見を押し通そうとする場面が多く見られた。
C	グループの一員としての役割も果たそうとせず常に消極的で、他者や社会に貢献しようとする意志も見られなかった。	他者の課題意識に追従して活動をスタートさせたため、興味関心をもつ事柄を見出せず、積極的に探究を行うことができなかった。	グローバル探究に関連していない課題設定となってしまった。	調べた資料やデータをただ列挙しただけにとどまっている。	他者に思いを伝えようとする気持ちは持っていない。もしくは、他者に思いを伝えることができなかった。	自らと考えや価値観の異なる他者の存在を認めることができず、周囲から促されて交流をする程度に留まってしまった。

(表 2)

【 発 表 】	
S	原稿を見ず、聞き手への配慮もなされ非常に聞き取りやすかった。
A	原稿を見るのは最小限で、聞き手への配慮がなされ聞き取りやすかった。
B	原稿を見ながら、もしくは声が小さく聞き取りにくかった。
C	原稿を見ながら、かつ声も小さく聞き取りにくかった。
【 内 容 】	
S	綿密な調査に基づき、独創性のある興味深い課題解決策を提示していた。
A	課題解決策の着眼点などに良さがあり、さらなる飛躍、発展を期待したい。
B	課題解決策が調査不足であったり、一般的なものであったりなど物足りなさを感じられた。
C	課題について調べたことをただ発表しているだけであった。

6 成果

現高校 1 年生のためのプレ活動としての位置づけであった「グローバル探究」に関しても、高校 2 年生に対して一定の成果を上げることができたように思う。本開発単位では、「リージョン探究」で育まれた地域の未来に対して貢献したいという思いを、グローバルな視野と考え方を身につけることで実際に地域に貢献することのできる力へと発展させることを意識している。今年度は、プレ活動ではあるが、現高校 2 年生も昨年度 S GH アソシエイトプログラム「探究基礎」で地域の抱える課題に取り組んでいるため、今年度と同様の成果を次年度も期待することができると考えている。また、本開発単位においても、活動の最初にループリック評価表を提示し、時折振り返りの機会を設けたことは資質の向上という点において非常に効果的であったと感じている。以下に本開発単位で期待される成果と対比させながら詳細を述べる。

i 資質①「献身性」

カトリックミッションスクールとしての本学の特質はすでに「リージョン探究」で述べたため、ここでは再び述べることは避けるが、その心が土台となり、事後に実施したレポートから「自分は教育の問題にチャレンジしたが、自分で調べたことはもちろんだが、他の班の発表を聞いて、貧困に苦しんでいる子どもたちのために、教育を届ける活動をしていきたいと感じるようになった」(教育)や、「これまで自分の中で、教育の問題は教育、福祉の問題は福祉と別々に考えていたところがあったが、今回の『グローバル探究』を通して一つの問題にも複数の要因が関わっており、様々な視点からアプローチをしていくことの大切さを感じた。将来、何らかの形でこのような問題に携わっていきたいと感じるようになった」(福祉)などの感想があり、本事業が本学生徒の土台にある「献身性」を将来の生き方に繋ぐことができていることが確認できた。

ii 資質②「興味・関心」

本開発単位終了後に実施したレポートには、「自分が興味を持っていたことに対してとことん調べることができたのはとてもよい経験になった。また、これまで興味を感じていなかった分野の中にも、興味深い課題があり、興味が広がったと思う」(環境)、「去年の探究活動では悔いの残る部分があったので、積極性をもって活動することを心がけました。自分の興味があることに取り組むことが

できたので、より積極的になれたような気がします」(環境)などと、他の分野に対する興味関心を広げるとともに、興味関心が積極的な行動に繋がっていくという事例も確認することができた。また、「環境」分野は、これまであまり本学で取り扱うことのなかった分野であったが、SGHアソシエイトプログラムにおけるアンケートからも取り組んでみたいという要望が強い分野であったため、生徒の興味関心を上手く汲み取ることのできる分野であるということを確認することができた。

iii 資質③「確かな知識」

「リージョン探究」同様、本開発単位終了後のアンケートでは、「自分で創るフィールドワーク」成功班を中心に、インターネット上で調べた情報よりも、自らの足で調査した情報にこそ価値があるという意見はいくつも見られたが、高校2年生で2つ目の探究活動を終了した段階になると、「自分の将来やりたいと考えている仕事に関係することをテーマとして探究活動を行ったので、これまで漠然とした目標だったが、その周りにある様々な問題を知り、より具体的に将来について考える機会に繋がった」(教育)、「私は今回食糧廃棄の問題に挑戦しました。日本はまだ食べることのできるものを多く捨てているだろうとは思っていましたが、これほどの量だとは思いませんでした。改めて毎日お腹いっぱい食事ができている自分たちは恵まれていると思い、これが当たり前と思っていることを反省し、世界中の人が飢えに困ることのないシステムを作りあげることの大切さを再確認しました」などと、「確かな知識」が身につくことで、将来の生き方や感謝の心などに広がっている様子も確認することができた。

iv 資質④「課題発見および設定力」

「グローバル探究」において最もポイントとなるのがこの資質である。「リージョン探究」では、講師より与えられた課題に対して「最善の解」を求めるという活動であったが、本開発単位では、「教育」「福祉」「女性」「環境」の4つのテーマの中からグループおよび個人で課題を発見、設定した上で探究活動に入ることになる。本開発単位終了後のレポートでも、『※探究基礎』では与えられたことに取り組むだけなので、実はとても簡単だったということが分かった。いざ、自由に課題を設定してもよいと言われても、普段から新聞を読んだり、ニュースを見たりしていなかったもので、どのような課題が存在しているのかさえ分からず非常に困った」(福祉)などと、課題を設定することそのものの難しさを訴えるものが見られたり、「今回『あおり運転』をテーマに探究活動を行った。自分たちなりに色々調べてみたが、罰則を厳しくするなど正直当たり前の結論しか出すことができなかった。このような問題は個人による心の持ちようが大きく、正直自分たちではどうにもならないことだったと思う」(福祉)などと、他の班と課題設定が重複しないことやキャッチーさを優先させた結果思い通りの成果を得ることができなかった例が見られ、高校生が自ら課題を設定することの難しさを感じられた。しかし、難しいと感じることにチャレンジすることやチャレンジして失敗することにも価値があると考え、ある種の成果としたい。

また、同時に「昨年よりもテーマ設定の自由度が高く、自分の関心のある分野で探究活動に取り組めたので、積極的に楽しみながら取り組むことができたと思う。また、興味があるからこそ突き詰めて調べたり、考えたりしようという気持ちになったので、非常によい体験になったと思う」(環境)などと、自分の関心と繋がると質の高い取り組みに繋がる傾向が見られた。さらに、「他の班の発表を聞いて最も刺激を受けたのは、自分たちもその課題に関わっているという立場で考えている班の取り組みだった。『グローバル探究』は大きな社会課題を扱うので、どうしても自分たちと関係のな

いところで起きている問題と捉えてしまい、第三者的な視点になってしまったような気がする。今後は自分との関わりを考えながら課題を見つけていくとよいのではないかと感じた。そう考えると『女性』や『環境』の分野ではそのような立場で課題を考えやすいように思う」(教育)などと他者の成果を参考にして、より適切に課題設定を行う方法を模索するような生徒の姿も見られた。

※「探究基礎」… SGHアソシエイト活動での高校1年生段階のプログラム。現高校2年生は高校1年生の時、SGHアソシエイトプログラムに取り組んでいる。

v 資質⑤「課題解決力」

本単位終了後のレポートでは、「昨年取り組んだ地域課題とは異なり、『グローバル探究』では考える規模が大きく、自分たちができることは限られていて、取り組みに難しさを感じた」(福祉)などと課題の規模が大きくなることで、調べる範囲も広くなり、苦戦したという内容が見られたが、同時に「私たちは女性の社会進出の際に障害となっている待機児童の問題に取り組みました。ポスターセッションの時に解決のアイデアが大雑把で分かりにくいというアドバイスをもらったので、最終発表会では、待機児童数が最も多い東京都をモデルにして考えてみました。そのおかげでより具体的に考えることができ、ポスターセッションの時よりは説得力のあるアイデアを提案できたと思います」(女性)や、「今回自分たちなりにできることはやったつもりですが、まだまだ納得できる解決策を提案することはできませんでした。しかし、私たちが社会に出て働く頃には、このような探究活動で経験した答えが1つではないことに取り組む姿勢が大切になる時代になっていると思います。高校生のころにこのような体験ができていることはとても幸せなことだと思うので、他者を尊重し、協力しながら課題を克服していく力をこれからも磨いていきたいと思います」(環境)などと、前向きに課題解決力を育てていく姿勢は身につくように感じている。

vi 資質⑥「表現・発信力」

「リージョン探究」同様、発表の際に台本を見ずに、自分の言葉で発表することができなかったという反省が目立つ内容ではあったが、「グローバル探究」においては、「自分で創るフィールドワーク」を行ったことにより、少し方向性の異なった意見も見られた。「最初は、東京に行けるかもという気持ちから取り組んだフィールドワーク作成だったが、実際に調べたいと思った会社の方にメールを送り、返信をもらい、自分の気持ちを伝えたところ、担当の方からフィールドワークの受け入れOKの連絡をもらった時はとてもうれしかった。後で聞くと、その会社の社長さんが、ぜひとも受け入れてあげなさいと言ってくださったそう。実際にフィールドワークで訪問すると、多くの社員の方が私たちの調査のために色々と協力してくださり、これまで体験したことのなかった貴重な体験をすることができた。もし、最初に恥ずかしくてメールを送らなかつたらこんな体験をすることはできなかったと思う。そう考えると、積極的に自分の思いを発信することは大切だと感じた」(女性)というように失敗を恐れず発信することの価値を伝える意見が見られたり、「2年目の探究活動で一番変化したと感じるのはグループの中での意思疎通だと思う。たまたま気の合った友達とグループを組むことができたからかもしれないが、メンバーの意見をしっかりと聞きながらも、自分の意見もしっかり発言することができ、議論を進めていくことで解決策がより具体的になっていくのを感じることができた」(福祉)と発表の場だけでなく、探究活動の過程における「表現・発信力」に言及している意見が見られる点にも成長が感じられる。

vii 資質⑦「主体性」

もちろん積極的に行動することができなかつたというような意見も見られたが、「グローバル探究」は、自分たちで課題を発見・設定する、自分たちでフィールドワークを組み上げるなどの点で主体性を引き出しやすい取り組みとなっており、主体性に触れている意見は数多く見られた。「調べ学習で終わるのではなく、『何かを変えてみたい』という意識を持って活動することで、どんどん取り組みは深まっていくのだなというのを実感することができました。積極的なメンバーが多く、相乗効果のようなものもあったと思います」（環境）、「自分でやりたいと思うことを決めて取り組んだので、自分の中では楽しみながら興味を持って活動できたと思っています。他者評価からも『とても楽しそうに活動している姿が印象に残りました』というコメントをもらえたこともとてもうれしかったです。また、自分が楽しめているからか、今回の探究活動では、楽しくなさそうに取り組んでいるメンバーの存在がとても気になりました。自分なりにそのメンバーに手助けを依頼したりしてみましたが、なかなか上手くいきませんでした。うまく『人を巻き込む』ことができる人になりたいと思いました」（教育）、「私たちの班は『子ども食堂』について探究活動を行いました。実際に地元にある『子ども食堂』にボランティアの形でフィールドワークに行かせてもらい、ニュースなどでは分からなかった『子ども食堂』の運営の難しさについて学ぶことができました。私たちが訪れた『子ども食堂』は、運営している人の善意で成り立っていたので、私たちはそれ以降も時々ボランティアとして参加しています」（教育）などと、次のアクションに繋がる主体性が見られるのは非常に喜ばしい成果である。

viii 資質⑧「多様性受容力」

「リージョン探究」においては、コースやクラスの枠組みを取り払ってグループ編成を行うことで「多様性受容力」を育成しようとする取り組みを行った。しかし、高校2年生はコース毎に単位数が異なっており、昨年度と同じ形ではグループ編成ができず、すでに友人関係ができあがっているクラス内でグループ編成を行わざるを得なかつたため、昨年度と同じ形で「多様性受容力」の育成を目指すことはできなかつた。本学には「あなたはあなたであることですばらしい」という言葉で表現される個人の「唯一性」を大切にすることをカトリックの教えがあり、それが生徒たちの土台となっている。そのため、今年度の取り組みにおいては、意外な所から「多様性受容力」の高まりを感じることができた。

その1つがテーマ設定である。生徒たちの設定したテーマには「LGBTQ」や「ユニバーサルデザイン」、「日本在住の外国人児童の教育問題」、「不登校問題」など社会的弱者として差別や偏見を受けている人たちをクローズアップしたものが数多く見られた。また、「環境」分野の課題に取り組みたいという要望が根強かつたのも、「環境」の課題が、様々な立場の人々の様々な思惑が複雑に絡み合っているものであり、「多様性受容力」が高まっているからこそ取り組みたいと感じているということがうかがわれた。

さらに、生徒のレポートからも「多様性受容力」の高まりを感じることができた。「人にはそれぞれ得意な分野があり、それをグループで共有すると一人で何かを行う時よりも何倍も良いものになることができるということを強く感じました。また、普段の何気ない会話とは違い、探究活動中に話をするとその人の違った一面が感じられるのもとても新鮮でした。私はこれまで価値観が違うということをマイナスに受け止めていましたが、少し考え方が変わってきました」（教育）などと他者との違いを受け止め、それをプラスに捉える意見も散見された。

また、「ネット上だけでなく、自分の足で調査を行っている班や、アンケートなどを行ってデータを集め、上手く活用している発表にはとても説得力を感じました。『グローバル探究』は、様々なテーマの発表があり、発表を聞いてとても楽しかったです。それはおもしろいとか興味を感じるポイントが人によって違うということだと思あるので、それぞれの人が自分の良さを積極的に活用していけば、こんなに多くの課題がある今の社会もよい方向に向かうのではないかと感じました」(福祉)などと、生徒たちが幅広いテーマを取り扱って活動したことが結果的に他者を尊重する姿勢にも繋がったように感じている。

○ その他

i 社会や将来などに対する意識の向上

高校2年生は、2つ目の探究学習ということもあり、「このような学びがないと地域や日本や世界が抱えている問題について調べたり、話し合ったりする機会はないと思うので、高校生でこのような活動ができることは幸せなことだと思う」、「地域協働事業では、他校の高校生とも交流する機会があるので、それがとてもよいと思う。自分たちの知っている範囲だけが普通だと判断してしまうが、意識の高い他校の生徒と交流することで、とても刺激を受けた」、「新しい発見があったり、今まで知らなかったことを知ったりすることが、将来の仕事を決めるのに繋がっていくのかもしれないと思ったので、『グローバル探究』の活動はとてもよいと思った」、「答えが一つではない問題に取り組むことはとても難しいことだけど、とても大切なことだと思います。私たちの目の前にいる先生方も、こうすれば必ず私たちの成績が伸びるとか、私たちの夢を叶えることができるというたった一つの答えを知っていて、それに従って教えてくださっている訳ではありません。私もどんな仕事に就くかは分かりませんが、少しでも多く自分の会社の商品売るとか、少しでも自分の会社を発展させるとかという答えのない問題と向き合いながら仕事をしていかないといけないと思うので、『グローバル探究』のように他の人と協力しながら何かに取り組める人になるために、これからも積極的に取り組んでいきたいと思いました」など、座学の学習が中心だった頃と比較すると明らかに社会や将来への意識の向上が感じられる。

ii 社会課題に対する当事者意識の向上

探究学習を取り入れた頃は、まだまだやらされているという意識が強かったが、今年度の「グローバル探究」を終えた高校2年生のレポートからは「当事者意識」という言葉が散見された。「これまでの探究活動では、その課題の当事者としての意識を持たずに解決策を導きだしていたように思います。課題と距離をおいて解決策を考えても、それは解決しようとしているのではなく、ただ対処しているだけで本当の解決には繋がらないということが分かったので、ぜひ今後は自分もその課題の一部を担っているという意識のもとで探究活動を行っていきたく思います」などと、今後は楽しみなレポートがいくつも見られた。

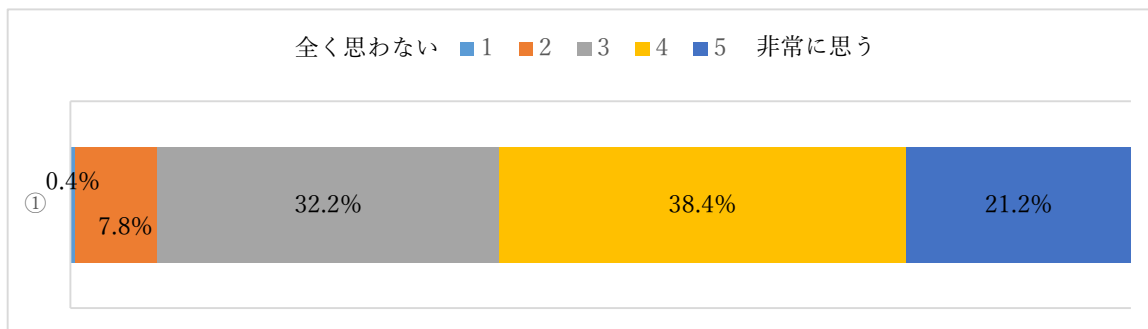


7 事後アンケートの集約

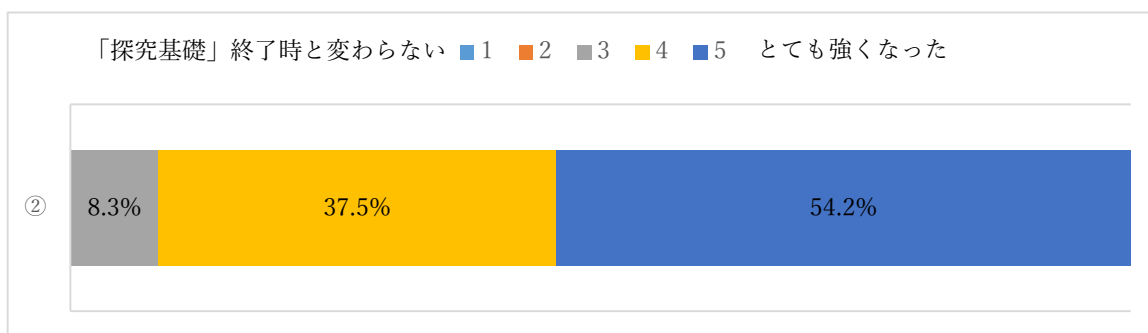
1年間の学びの効果を測定するため、アンケートを実施した。その結果を以下にまとめる。

○ 質問項目

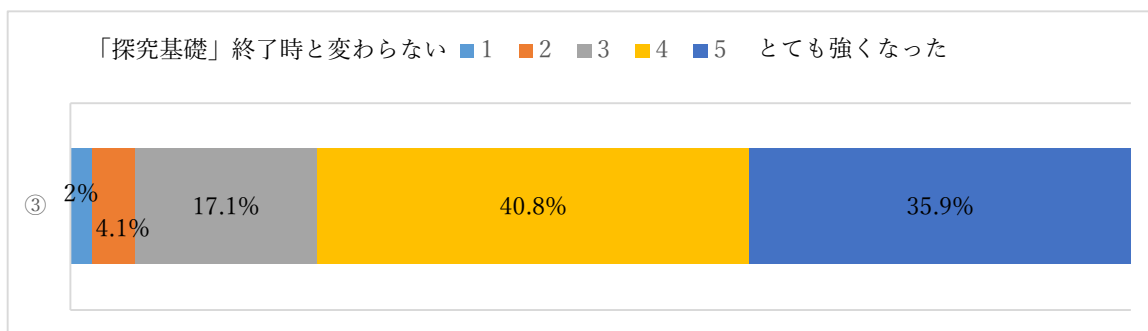
- ① 「グローバル探究」および高校1年次の「探究基礎」の活動を通して、将来「地域」の課題解決のために尽力してみたいと思うようになりましたか。



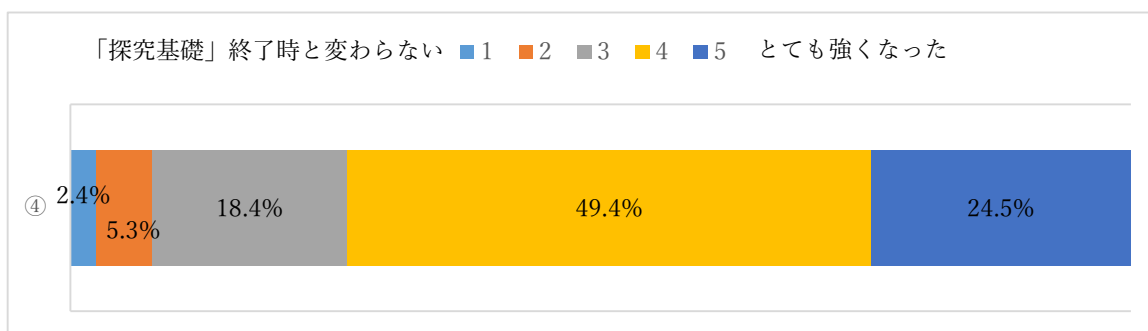
- ② 「グローバル探究」の学びを通して、様々な問題や課題に対して広い視野で考えることが大切だという意識はどのように変化しましたか。



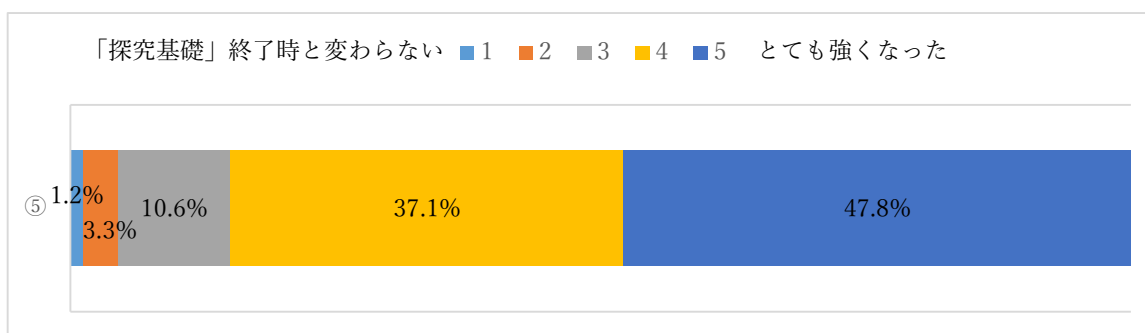
- ③ 「グローバル探究」の学びを通して、他者と協働することが大切であるという意識はどのように変化しましたか。



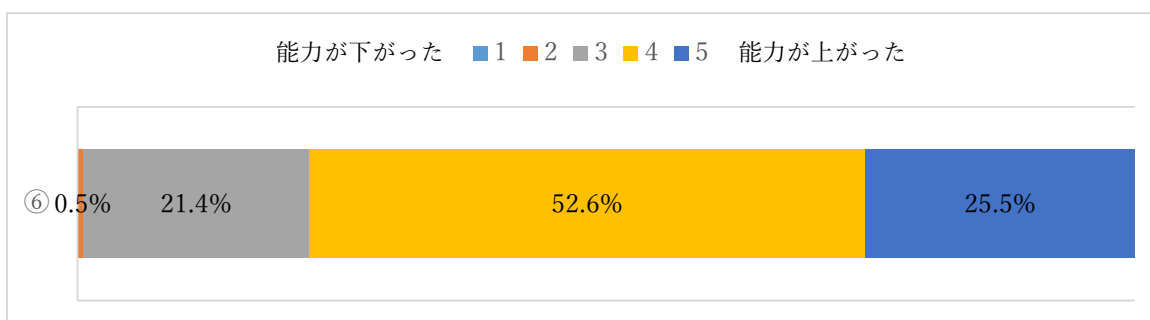
- ④ 「グローバル探究」の学びを通して、新しいことや難しいことにチャレンジすることが大切であるという意識はどのように変化しましたか。



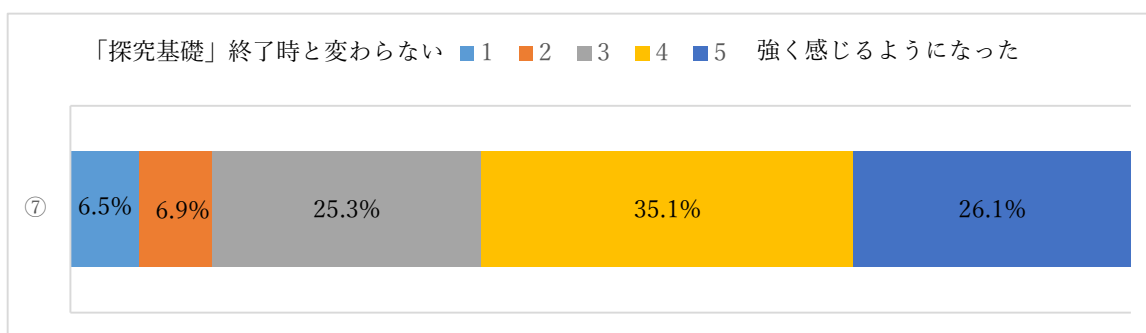
⑤ 「グローバル探究」の学びを通して、これからの社会では答えが一つではない課題と向き合う必要があるという意識はどのように変化しましたか。



⑥ 「グローバル探究」の学びを通して、「納得解」・「適正解」を導く能力はどのように変化しましたか。



⑦ 「グローバル探究」の学びを通して、英語を学ぶことの重要性を感じるようになりましたか。



8 次年度以降への課題

本開発単位の運営を通して、本事業のプレ活動として、一定の成果を得たと感じる事ができた。しかし、本開発単位終了と同時に、本事業の1期生である現高校1年生のプログラムがスタートする。明らかになった課題の詳細を述べ、できる限りの改善を図りたい。

i 課題設定の条件不備

「グローバル探究」では「課題発見および設定力」の向上を意図したため、SDGsの「教育」「福祉」「女性」「環境」の分野でさえあれば、自由に課題設定をしてもよいとした。しかし、「自由に課題を設定すること」にこだわりすぎて、せっかく生徒たちが探究学習の成果として提示した解決策の設定がバラバラになってしまい、運営指導委員会でも指摘を受けた。そこで、現高校1年生はSDGsを意識することもあり、①「2030年を期限として」・②「持続可能なシステムを構築する」という条件の下で自由に課題設定を行うことにした。

ii 「自分で創るフィールドワーク」の次年度実施について

S GHアソシエイトの頃から、グローバル課題を扱うフィールドワークは内容を進化させながら、東京を舞台として夏期休業期間に実施しており、今年度も4名の生徒が受け入れ先を確保し、貴重な学びを得てきた。しかし、次年度は今後何らかの変更の可能性もあるが、夏期休暇中に東京オリンピックおよびパラリンピックが実施されることになっている。現状、宿泊先を今年度と同じ金額で確保することは難しく、そもそも宿泊先すら確保できないかも知れないという連絡を旅行会社より受けている。

現状では確定していないが、次年度は大阪に宿泊先を定め、和歌山を除く通勤圏内でフィールドワーク先を確保するという形を現状模索している。

iii 発表会の形式について

当初は昨年度を踏まえ、探究グループを学年全体で40程度と想定していたため、1つの会場で2日に分けて実施することで対応しようと考えていたが、どうしても探究課題にこだわりがある場合は、個人での活動も許可するという条件をつけたところ、最終的に学年全体で63もの探究グループができてしまった。そのため、想定していた時間内では、発表会を実施することができず。急遽、会場を2カ所に分け、同時実施という形で対応した。運営そのものは時間的にも余裕があり、アドバイスシートの記入にも十分時間をとることができたという利点もあったが、事後のレポートでは全ての発表を聞きたかったという生徒からの意見もあり、次年度に向けて対応を考えたい。

iv 「リージョン探究（旧探究基礎）」との連動性の欠如

これは、今回「グローバル探究」に取り組んだ高校2年生が、S GHアソシエイトプログラムと本事業との移行期にあたるということで仕方のない部分であるかもしれないが、「グローバル探究」の目的である「課題を広い視野で見える力をつける」ということがもう一つ生徒の中に浸透していなかったことがあげられる。

最終的に「地域の未来に貢献する人材を育成すること」が本事業の目的であるため、「おらが村」という発想になることを避けるために「グローバル探究」を実施したが、そもそも高校2年生はS GHアソシエイトプログラムとして「地域」から「世界」へと視点を広げることが昨年度段階での目標であった。生徒たちは我々運営側の都合に左右されたこともあり、その辺りで混乱が生じてしまったように思う。本事業の1期生にもこれが当てはまるかは分からないが、「グローバル探究」に取り組むことで、地域の課題に対して広い視野をもって向き合うという意識は丁寧に説明したいと考えている。



消滅可能性都市を利用し 待機児童を減らそう！

女性 4班



1

女性の社会問題に取り組んだきっかけ

女性がワークライフバランスを考えながら働ける環境を作りたい



そこで

フィールドワーク（リブセンス）

2



しかし…

現在、企業ではそのための制度が実施されている



女性が働けるようになるまでの環境を改善

3

そこで…

待機児童に目を向ける
ことに！

4

待機児童数及び保育利用率の実績の推移

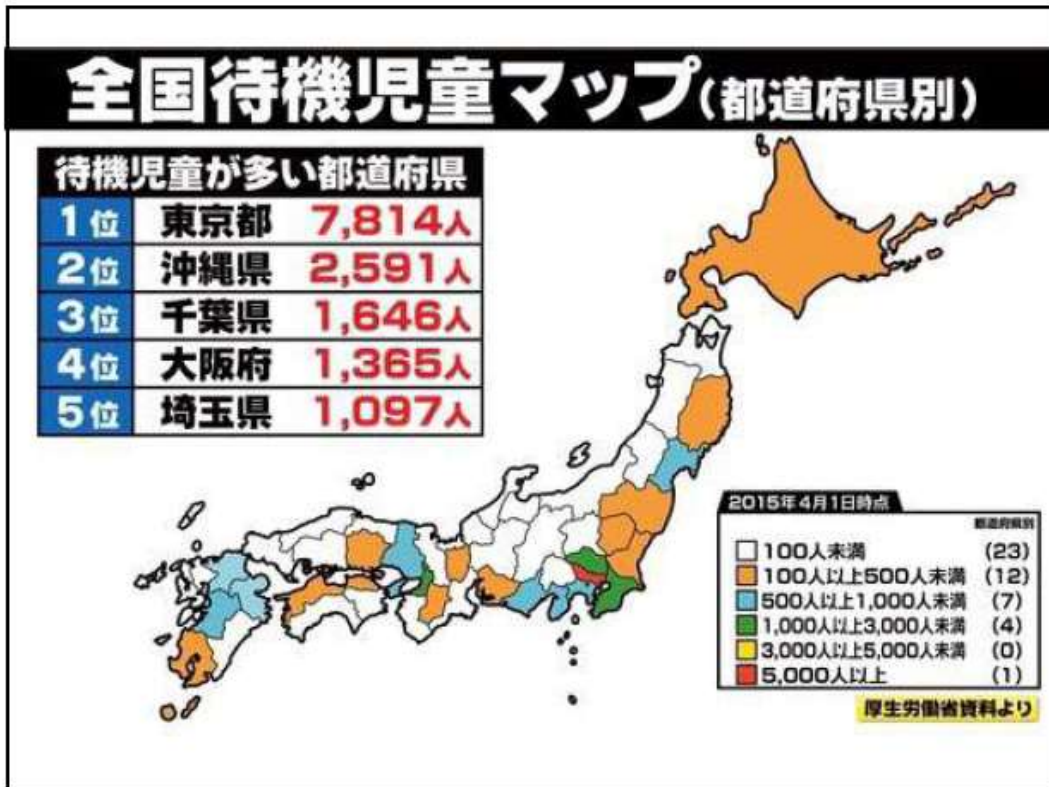


5

待機児童数が多い原因

- ① 経済不況の影響を受け、共働き世帯が多くなった
- ② 児童の都市部への集中
- ③ 保育士の不足

6



7

消滅可能性都市とは？

2010年から2040年にかけて、20～39歳の

若年女性人口が5割以下に減少する市区町村

8

消滅可能性都市の特徴

- ① 人口が少ない
- ② 高齢者が多い
- ③ 廃校など、使われていない施設がある

9

ちるえるハウスとは

- * 消滅可能性都市の使われていない施設を利用した子供を預けることができる施設
(今回注目した都市は奥多摩)
- * 高齢者がボランティアとしてハウスの手伝いをする事で営まれる

ちるえるハウス

ちる→childrenのちる える→elderlyのえる



10

ちるえるハウスのメリット

- ・消滅可能性都市に若者が増え、都市が栄える



- ・高齢者が手伝うことで保育士不足の問題を解消する

11

ちるえるハウスのメリット

- ・高齢者と触れ合うことで、子供たちが高齢者を労わる心を持つようになる



- ・高齢者に生きがいができる

12

消滅可能性都市である奥多摩市…

都市部まで **1時間15分!!**



13

海外でも、待機児童は問題視されている

ドイツ、オランダ、韓国など、日本以外でも
待機児童に悩む国がある

➡ ちるえるハウスを利用
すれば、解決できる！

14

まとめ

- ①私達が目指すもの：女性が働きやすい社会実現
- ②課題：労働人口が最も多い東京都で待機児童が多いことが問題となっている



それを解決するためには・・・

- ③消滅可能性都市（奥多摩町）に子供を預けることが出来る施設（ちるえるハウス）を作る

- ちるえるハウスのメリット
- ・消滅可能性都市が若者で栄える
 - ・保育士不足の解消
 - ・子供たちの高齢者への思いやりの気持ちの醸成
 - ・高齢者の生きがい作り

電子廃棄物の行方

環境22班

1

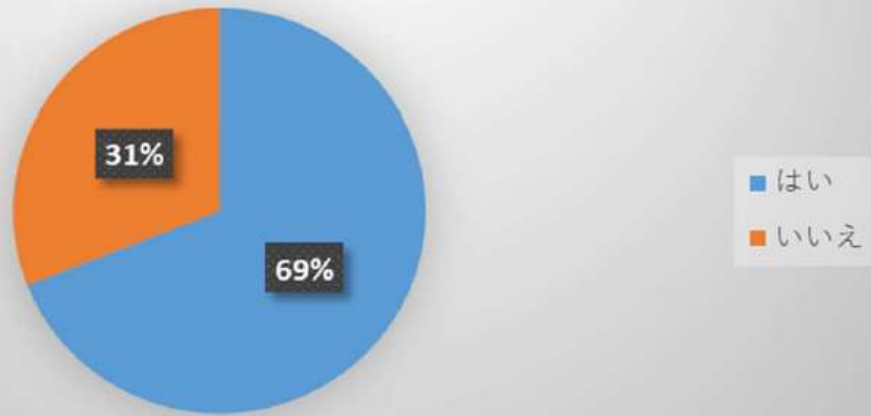
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS
世界を変えるための17の目標

1 貧困をなくそう	2 飢餓をゼロに	3 すべての人に健康と福祉を	4 質の高い教育をみんなに	5 ジェンダー平等を実現しよう	6 安全な水とトイレを世界中に
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに	8 働きがいも経済成長も	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	10 人や国の不平等をなくそう	11 住み続けられるまちづくりを	12 つくる責任 つかう責任
13 気候変動に具体的な対策を	14 海の豊かさを守ろう	15 陸の豊かさも守ろう	16 平和と公正をすべての人に	17 パートナースHIPで目標を達成しよう	SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 2030年に向けて世界がのめした「持続可能な開発目標」です。

15, 陸の豊かさも守ろう

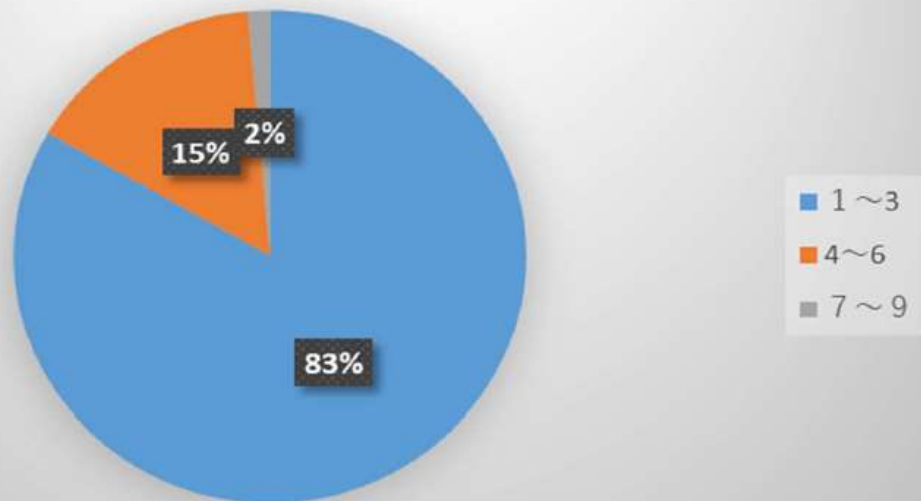
2

家に使われなくなった携帯電話は ありますか



3

はいと答えた人の台数



4

ガーナのごみ山

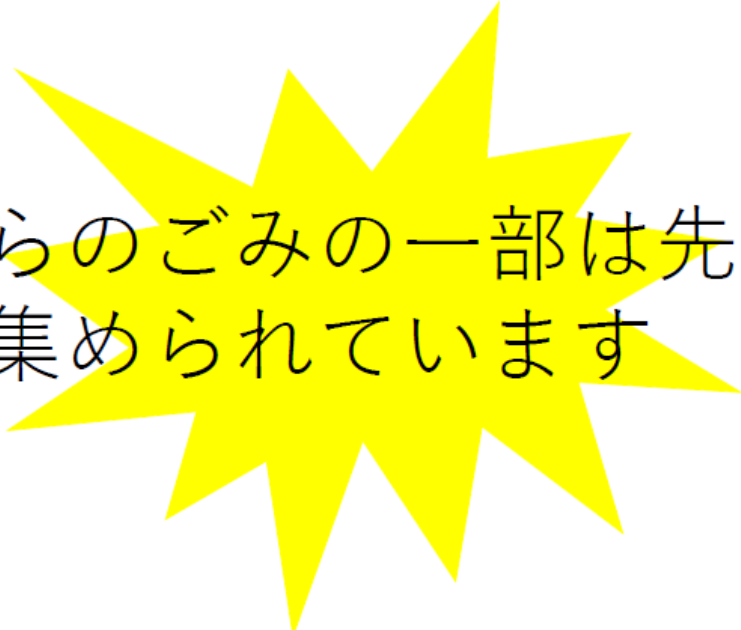


<http://karapaia.com/archives/52182012.html>

5

実は...

6



これらのごみの一部は先進国
から集められています

7

影響

電子廃棄物を燃焼する



有害物質が出る



身体に悪影響を及ぼす

8

原因

ごみのリサイクルに税金がかかる



発展途上国に寄付として輸出し、税金負担を減らす

9

解決策

電子廃棄物研究所

- ①燃やしても有害物質が出にくい電子機器の開発
- ②メタルバイオテクノロジーの研究
- ③金属を分解する菌や金属を食べるミミズの繁殖

10

①電子機器を作ることについて

燃やしても有害物質の出にくい電子機器の開発
回収した携帯電話から取り出した金属などを
開発に利用する

11

②メタルバイオテクノロジー

微生物の持つ能力を生かす

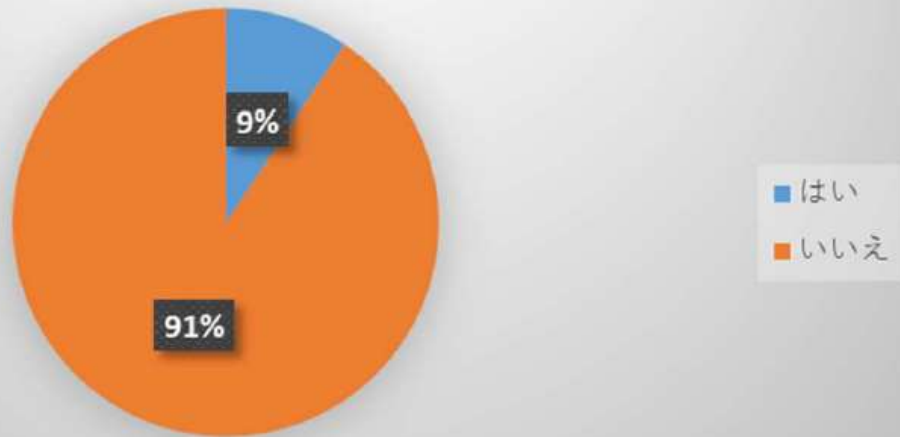
例えば…

セレンのリサイクル工場の排水汚泥から発見された
NT-Iは有害なセレンを金属セレンに変えること
によって浄化

<https://sciencechannel.ist.go.jp/M160001/detail/M150001024.html>

12

金属を食べるミミズが存在することを 知っていますか？



13

③ルンブルクス・ルベルスとは

- ・有機廃棄物を餌にするスーパーミミズ
- ・重金属を食べて排泄

↓
植物が排泄物を吸収する

↓
土壌が浄化される



<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/466/>

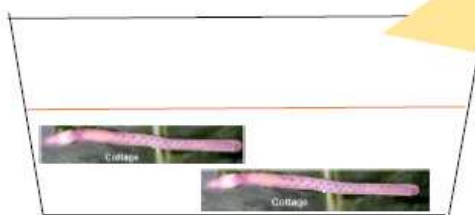
14

ミミズバケツ

育成者 ミミズを育てたい人・会社
利用者 工場付近など汚染された土壌・農家
目的 ミミズを繁殖させる!!

15

詳細



- ①ミミズ（ルンブルクス・ルベルス）入れる
- ②この容器を育成者に渡す
- ③繁殖させる
- ④回収する
- ⑤増えたミミズを汚染土壌に入れる

16

問題点と解決策

研究者の確保



大学と協力し、大学院生には奨学金を提供
SNSやYouTubeで広告を発信

資金の調達



寄付
クラウドファンディング

17

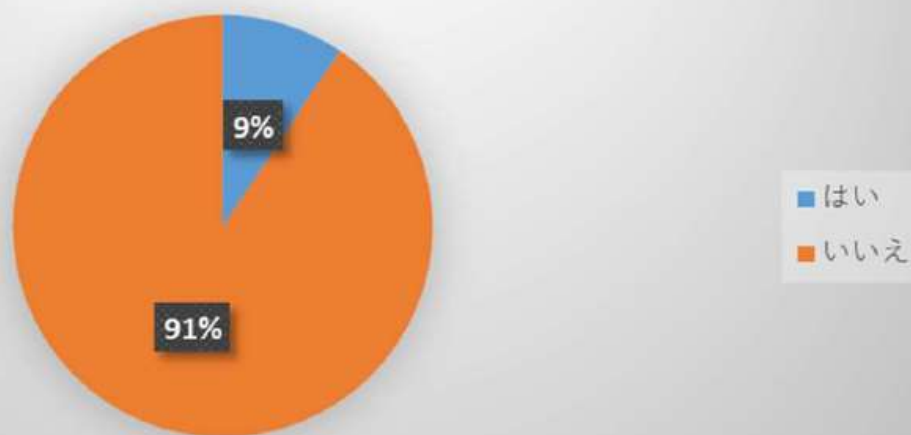
まとめ

・ 土壌汚染問題の解決につながる

・ 人々の廃棄物問題に対する関心の向上

18

ガーナに日本の電子廃棄物の一部が輸出されていることを知っていますか？



19

参考文献

<http://karapaia.com/archives/52182012.html>

<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/article/news/14/466/>
NATIONAL GEOGRAPHIC

<https://sciencechannel.jst.go.jp/M160001/detail/M150001024.html>
SCIENCE CHANNEL

20

③ 開発単位Ⅱ「グローバル探究」(高校1年生1月から)

1 目的

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』1目的」と同じ。

2 内容

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』2内容」と同じ。

3 期待される成果

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』3期待される成果」と同じ。

4 概要(実践)

i 今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容
3	1	1月22日(水)	1	「グローバル探究」ガイダンス
				・地域協働事業および「グローバル探究」の内容説明
				・「グローバル探究」ループリック評価表の配布
	2	2月5日(水)	2	「グローバル探究」第1回オリエンテーション
				・「女性」「教育」分野の説明
	3	2月26日(水)	2	「グローバル探究」第2回オリエンテーション
				・「環境」「福祉」分野の説明
	4	3月16日(月)	2	「グローバル探究」コンソーシアムの支援による特別講演 ※
月山綜合法律事務所 弁護士 河合 佑香 さん				

※3月16日の特別講演は、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため、実施できず。

ii 担当講師

教育 : 和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科 辻伸幸先生

福祉 : 日本赤十字社和歌山医療センター 益田充先生

女性 : 一般社団法人女性と地域活性推進機構 代表理事 堀内智子先生

環境 : 徳島大学環境防災研究センター 松重摩耶先生

5 評価

i 評価方法

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』5評価、i評価方法」と同じ。

ii ループリック評価表

「②開発単位Ⅱ『グローバル探究』5評価、iiループリック評価表」の(表1)および(表2)を用いる。

6 現状報告

本開発単位は、「リージョン探究」を終了した高校1年生が本年度1月よりスタートしたものである。プレ学年である高校2年生には実施することができなかったが、「教育」「福祉」「女性」「環境」の4分野にそれぞれ1名ずつの講師を依頼し、2月の段階で各講師よりSDGsとそれぞれの分野の関わりについての講義を受けた。生徒たちは、配布したワークシートを使いながら、その講義内容を基に分野選択と課題設定を進める。探究グループの編成に関しては、次年度4月の段階でクラス替えが行われるため、その後実施する。

なお、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置により一部の活動を実施することができなかった。

7 参考資料（分野選択のためのワークシート）

高校1年生 【グローバル探究】講演会		組 番 _____	
<p>2月5日（水）</p> <p>6限【女性】一般社団法人女性と地域活性推進機構 堀内智子先生</p> <p>メモ</p> 	<p>2月26日（水）</p> <p>6限【環境】徳島大学 環境防災研究センター 松重摩耶 先生</p> <p>メモ</p> 		
<p>7限【教育】和歌山信愛大学 辻伸幸先生</p> <p>メモ</p> 	<p>7限【福祉】日本赤十字和歌山医療センター 益田充 先生</p> <p>メモ</p> 		
<p>・次の4分野について、それぞれ自分の興味のある課題を調べてみましょう</p>		<p>・4分野の中で自分が取り組みたい分野と取り組みたい課題は何ですか</p>	
<p>【女性】</p> 	<p>【環境】</p> 	<p>分野 []</p> <p>課題</p>	
<p>【教育】</p> 	<p>【福祉】</p> 	<p>・その理由についてまとめてみましょう</p>	
		<p>・上記の分野について、日本の社会や企業、また世界ではどのような取り組みがなされているのか調べてみましょう</p>	
		<p>4月から新クラスで本格的に活動を始めます。それまでにしっかりまとめておきましょう！</p>	

④ 開発単位Ⅲ「キャリア探究」(高校2年生1月から ※プレ活動)

1 目的

「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今存在していない職業に就くだろう(キャシー・デビッドソン)」。この言葉は、近年至るところで耳にする言葉となった。これは、科学技術等が急速に発展する現代社会の中で、今後10～20年の間で社会の構造が大きく変化することを予測した言葉である。この言葉が発表されたのが2011年の8月。そこからもうすぐ9年が経とうとしている。また、近年日本でも「Society5.0」という言葉が聞かれるが、これは「狩猟社会」「農耕社会」「工業社会」「情報社会」に続く、仮想と現実を高度に組み合わせたシステムを用い、経済発展と社会課題の解決を両立する人間中心の新しい社会のことを指すそうである。このようにこれから社会に出ていく生徒たちは、変化を予測することの難しい時代を生きることになる。そのため、生徒たちには、このような社会の変化に受け身で対応するのではなく、自ら課題を発見し、時には国籍を越えた他者とも協働しながらその解決を図り、未来を切り拓いていく姿勢が求められる。

本開発単位では、本学のカトリックの理念による教育によって育まれた「奉仕・貢献の心」と開発単位Ⅰ・開発単位Ⅱの学びを掛け合わせながら、自らの生涯に渡って取り組みたい「ミッション(使命)」を見つけ、既存の職業観にとらわれない具体的なキャリアプランニングを行い、不透明な未来や将来に対して「不安」を抱くのではなく、「ワクワク」を胸にチャレンジできる人材へと成長することを目的とする。

2 内容

「奉仕・貢献」「リージョン」「グローバル」の3要素を意識しながら、人生を賭して取り組みたい「ミッション」を見つけるとい探究活動を通して、既存の職業観にとらわれないキャリアプランニングを行う。ワークシート作成、ジェネリックスキル測定テスト、他者のキャリアプランニングを聞くことなどの活動を通して、自らのプランを深めていく。なお、本開発単位は個人による探究活動とする。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

4 概要(実践)

i 今年度実施内容

学期	回	月日	コマ数	内容
2	-	12月16日(月)	-	「グローバル探究」の振り返り活動の最後に冬休み課題の提示
				・一般社団法人ナレッジキャピタル主催 「未来の“私の”仕事を考える」への応募
3	1	1月22日(水)	1	「キャリア探究」ガイダンス ・地域協働事業および「キャリア探究」の内容説明 ・「キャリア探究」ルーブリック評価表の配布
	2	2月13日(木)	1	地域協働事業(グローバル型)特別講演 産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊 道子さん
	2	3月16日(月)	2	コンソーシアムの支援による特別講演 ※ 月山総合法律事務所 弁護士 河合 佑香さん

※3月16日の特別講演は、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため、実施できず。

ii 担当講師

本開発単位は各個人による探究活動のため、講師は設定しない。学年に所属する教育改革推進事業運営チームを中心にして、クラス担任2名が指導にあたる。

5 評価

i 評価方法

カトリックの理念に基づく「奉仕・貢献の心」と「リージョン」「グローバル」の学びという3つ要素を意識した上で設定した「ミッション」を含むキャリアプランニングを提案するにあたり、主体的な探究活動の経緯とキャリアプランの具体性、そして本開発単位に関しては、本事業のまとめにあたるものと位置づけているため「継続・発展性」という項目を加味し、プログラム終了後に、「S（非常に優れている）・A（優れている）・B（改善を要する）・C（努力を要する）」の4段階ルーブリック評価表（iiルーブリック評価表）を用いて自己評価、相互評価、そして担当教員からの評価を行う。また、次年度実施するシャッフル発表会およびクラス内発表会、そして学年発表会における発表や内容に関してもアドバイスシートに付属したルーブリック評価表を用いる予定であるが、そのルーブリックは現在作成中である。

ii ルーブリック評価表

	姿勢		探究			コミュニケーション	
	献身性・主体性	興味関心	課題発見力 課題設定力	課題解決力	継続・発展性 【自己評価のみ】	表現力・発信力 （他者へ）	多様性受容力 （他者から）
S	自らの未来と他者や社会への奉仕・貢献という2つの視点が高いレベルで融合した活動を行うことができている。	自らだけでなく他者も大切な存在であると捉えた上で、これからの社会の中でどのようなキャリアを構築するかという点において強い興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマの本質を理解した上で、独自の課題を発見、設定することができている。	丁寧な調査によって社会構造の変化などを予測した上で、論理的で興味深い「最善の解」を提示し、その実現に向けて動き始めている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識し、強い向上心とともに「キャリア探究」における実践に反映されている。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることができるだけでなく、その情熱で他者の主体性も引き出すことができた。	自らと興味関心や考え方の異なる他者に強い関心を持ち、その考え方や経験を積極的に取り入れ、より質の高い成果につなげた。
A	自らの未来という視点だけではなく、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点も意識しながら活動することができている。	自らを大切な存在であると捉えた上で、今後の自己キャリアの構築に対して興味関心を持つことができている。	「キャリア探究」というテーマを踏まえ、適切な課題を発見、設定することができている。	社会構造の変化などを自分なりに予測した上で「最善の解」を提示することができている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを意識しながら、「キャリア探究」での実践に取り組んでいる。	他者に対して自分の思いを分かりやすく伝えることで、他者の心にも刺激を与えることができた。	自らと興味関心や考え方の異なる他者にも関心を持ち、その考え方や経験を自らに活用させようとする態度をとることができた。
B	自らの未来という視点を中心となり、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に乏しい活動になっている。	自らを大切な存在であると捉えながらも、今後の自己キャリアの構築について受動的で興味関心を持つことができていない。	「キャリア探究」というテーマを踏まえた上で、課題を発見、設定しているが、その課題設定に物足りなさを感じられる。	「最善の解」を提示することはできたが、それは現状から考えたものに留まっている。	これまでのプログラムにおける過程と結果から学んだことを「キャリア探究」における実践に活かしたいと考えていたが、行動に移せていない。	他者に対して自分の思いを伝えようとする気持ちはあるが、他者を巻き込むには至らなかった。	自らと興味関心や考え方の異なる他者の存在に気付いたが、自分とは違うという思いから何かを得ようとする態度をとることができなかった。
C	自らの未来という視点しか含まれておらず、他者や社会のために奉仕・貢献するという視点に欠けた活動になっている。	自らを大切な存在であると捉えることができず、今後の自己キャリアの構築という重要な課題に興味関心を持つことができていない。	「キャリア探究」というテーマの本質や全体を踏まえることもできておらず、適切な課題の発見、設定を行うことができていない。	しっかりと思いを持って取り組み、考えた上で「最善の解」を提示することができていない。	これまでのプログラムにおける学びが「キャリア探究」における実践に全く反映されていない。	他者に対して自分の思いを伝えたいという気持ちが乏しいため、他者を巻き込むこともできなかった。	自らの興味関心や考え方に以外に関心がなく、他者の考え方や経験を自らに活用させることの意義も理解することができていない。

6 現状報告

本開発単位は、「グローバル探究」を終了した高校2年生が、次年度現高校1年生を対象とする本格実施に向け、プレ活動として1月よりスタートしたものである。1月にガイダンスを実施した後は、講演を通して刺激を受けながら個人による探究活動を行っており、次年度4月から本格的に活動することとなっている。

なお、新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置により一部の活動を実施することができなかった。

⑤ 開発単位Ⅳ 各教科による「ミニ探究」授業開発

1 目的

開発単位ⅠからⅢが本事業の「主」の活動であるならば、本開発単位は、生徒たちにとってその主を補い、さらに発展させるための「副」の活動となる。開発単位ⅠからⅢにおける学びと「ミニ探究」の学びを相互に連携させながら、生徒たちを「生涯に渡って探究を深めていく未来の創り手」へと成長させることを目的とする。

また、本事業の3年間の指定が終了した翌年の2022年度は新学習指導要領が高等学校において年次進行で実施される初年度となる。この段階においてカリキュラムマネジメントにおいて地域の学校を牽引できるような存在となることを目指す。

なお、社会が変化することによって、社会から求められる能力も変化している現状において、生徒にチャレンジを求めながら、教員は何もしないでは生徒たちにとって説得力がない。教員も新たな学びに向けてチャレンジしている姿を生徒たちに見せることは、生徒たちのモチベーションにとっても大きなプラスになると考えられる。

2 内容

高等学校に在籍する全ての専任教諭が、本事業との関わりを考慮した上で、創意工夫のもと探究の要素を含んだ授業を年間に1つ開発・実践する。なお、その授業は公開形式とし、校務支援システム上で指導案・資料等を添付し、全教職員に告知する。さらに、授業の実施後は、教科会議において評価・改善を行い教材化する。

また、これらの成果を教科主任で構成されるカリキュラム検討会議において、「Key Girl」として育成したい生徒の資質・能力を踏まえた上で、いつどの段階でどの「ミニ探究」授業を実施するのが効果的かという観点を考え、年間を通しての本学独自のカリキュラム作成へと繋げていく。

3 期待される成果

「Key Girl」の資質 … ②・③・④・⑤・⑥・⑦

4 今年度実施状況

高校に在籍する50名の教員のうち、13名の教員が「ミニ探究」授業の実践を行った（※コロナウイルス感染拡大防止による休校措置で予定していたが実施できなかった教員あり）。また、今年度の「ミニ探究」授業の中には大学教員と連携したものや合教科の取り組みも見られ、一定の成果は見られた（内訳：国語4名、社会3名、理科6名）。

5 カリキュラム作成

実施教科の教科会議によって、内容の改善を実施し、カリキュラム検討委員会において授業の配置検討を行った。

6 成果

年度末に「ミニ探究」授業に関するアンケートを生徒対象に実施しようと考えていたが、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため、実施することができなかった。そのため、客観的な形での成果報告をすることはできない。しかし、「ミニ探究」授業の実践によって、生徒たちの「②興味・関心」「③確

かな知識」「⑤課題解決力」「⑥表現・発信力」「⑦主体性」は明らかに向上していると考えられる。

なお、「④課題発見および設定力」に関しては、どうしても「ミニ探究」授業中において各教員が教科に関わる内容で探究課題として提示するため、課題を発見・設定させる機会は今年度の「ミニ探究」授業においては見られなかった。

7 次年度への課題

当初、全専任教諭が創意工夫のもと、1コマ「ミニ探究」授業を開発するという予定であったが、本学は「総合的な探究の時間」を用いて、開発単位ⅠからⅢの運営に全ての専任教員が関わっているため、負担が大きくなり、実施することができない教員が見られた。次年度は、開発単位ⅠからⅢの運営にも多少慣れてしていると推測されるため、本開発単位の進捗状況も改善されると考えている。



⑥ 2019年度研究成果発表会

1 目的

本学が、本事業への申請を行ったのは、本学の生徒にこれからの社会で必要な能力をいかにして身につけるかという問いに対するチャレンジの延長線上から生じたものであるが、それと同時に「地域の未来」に対する貢献という思いも存在している。地元で大学がないということも大きく影響しているが、和歌山県の大学進学者の9割が他府県に流出するという現象が30年も続いているという厳しい現実、地域の未来を明るく照らすものとなるはずがない。そこで、本学の取り組みを少しでも早く地域の学校、地域の方々に見ていただき、地域の未来のために協働できないかと考え、当初3年目に実施予定であった研究成果発表会を2年前倒して実施することにした。

また、本学生徒に関しては、外部の方の前で発表する機会を提供するとともに、学年を越えた発表の機会を持つことで、高校1年生、2年生がともに刺激を受ける機会となることも期待した。

2 内容

今年度12月に実施した「リージョン探究」および「グローバル探究」の各最終発表会の中で、評価の高かった優秀班をそれぞれ8班ずつ選び（高校1年生は、最終発表会に参加してくださった講師先生の評価、高校2年生はGoogleフォームを用いた生徒による投票結果から選出した）、運営指導委員の先生方だけでなく、公開形式として、地域の学校、地域の人々へ参加を呼びかけた上で、実施した。

また、今年度は急遽発表会を実施することにしたため、教員のサポートも少なからずあるが、原則、生徒たちが中心となって運営することを目指していく。

3 当日のプログラム

2月12日（水） 研究成果発表会プログラム		於体育館	
13:00	受付開始		
13:20	生徒入場		
13:35	来賓、一般来場者入場		
13:40	開会		
	・開会挨拶	校長	森田 登志子
	・司会紹介	H 2 B	多計 和子
		H 2 B	永山 史夏
	・「グローバル探究」プログラム説明	運営委員長	大村 寛之
	・評価シート説明	司会	
13:50	「グローバル探究」発表		
	・教育 28班		
	・教育 2班		
	・福祉 18班		
	・福祉 29班		
	・女性 4班		
	・女性 40班		
	・環境 22班		
	・環境 12班		
14:50	休憩		
15:00	再開		
	・司会紹介	H 1 A	中下 璃子
		H 1 F	高橋 梓
	・「リージョン探究」プログラム説明	運営委員長	大村 寛之
15:10	「リージョン探究」発表		
	・医療 14班		
	・医療 16班		
	・経済 1班		
	・経済 9班		
	・産業 28班		
	・行政 23班		
	・農業 37班		
	・林業 38班		
16:00	閉会		
	・講評	運営指導委員	平山 恭子 様
		運営指導委員	渡邊 道子 様
	・閉会挨拶	副校長	紙岡 智
16:15	来賓、一般来場者退場		
16:20	生徒退場		

4 成果

当初実施を予定していなかった地域に対する研究成果発表会ではあったが、教員および生徒の協力を得て無事に実施することができたことが何よりもの成果である。これまで本学で行ったことのない行事に対して、工夫しながら運営のアイデアを出し合ったり、当日臨機応変に対応したりするという経験は本学にとっても非常に有意義なものとなった。

一方、生徒たちであるが、発表班に選ばれた生徒たちは、自分たちの探究の成果を最終発表会におけるアドバイスを踏まえ、さらにブラッシュアップして発表するなど強い向上心を感じることができた。また、惜しくも発表班に選ばれなかった生徒たちも、高校1年生を中心として、他者の発表から刺激を受け、次の探究活動に反映させたいと感じている様子が見られた。なお、以下に、当日の来場者等の情報を述べる。

i 事前告知

地元新聞	1紙
地元フリーペーパー	1紙
地元テレビ局	2局

ii 来場者（取材も含む）

- ・ 学校関係者
 - 県内の高等学校 3校（4名）
 - 市内の小学校 1校（1名）
- ・ 地域の方 10名
- ・ マスコミ関係
 - 地元新聞 1紙（1名）
 - 地元テレビ局 2局（4名）

iii 研究成果発表会に関する報道

- ・ 和歌山新報
- ・ NHK 和歌山放送
- ・ テレビ和歌山

5 次年度への課題

i 質疑応答

前述したことではあるが、本学の生徒は本質的に大人しく、人前で自らの意見を述べることを避ける傾向がある。その様な状況を打破していきたいという思いもあり、研究成果発表会では、各発表の後に質疑応答の時間を設けたが、前半の「グローバル探究」における発表の際には、生徒から全く質問がでなかった。これまでポスターセッションや最終発表会、また各種講演会などでは、口頭による質疑応答も一部行っていたが、体育館という大きな場所、かつ学外からの来訪者もいる中で質問をするということに対して及び腰になった生徒が多数いたように感じられる。ただ、休憩後の「リージョン探究」の発表で、1名の生徒が質問をしたことがきっかけとなり、そこからは発表者への質問が出

るようになった。この最初の 1 歩まで時間がかかるという現状を、本事業を通して何とか改善していきたい。

ii 地域への普及について

今年度、HP やテレビ・新聞等の媒体による告知や県内の各種学校および全国の本事業採択校などへの案内状送付などの手段を用いて研究成果報告会への参加を呼びかけたが、こちらが望むほどの来場者を集めることはできなかった。本地域は探究活動の重要性や地域の未来についての危機感がまだまだ乏しいという事実を再確認するとともに、地域の人々や地域の学校を巻き込んでいく必要性を強く感じている。地域との連携が上手くいっている他校の手法などを積極的に学び、次年度に繋げていきたいと考える。

⑦ その他の取り組みについて

A 海外研修（カンボジア）

1 目的

本事業におけるリーダー養成研修的な位置づけとして実施する。カンボジアの地方都市カンポットでの教育支援活動のお手伝いを中心として、日本では味わうことのできない非日常の体験が詰まった本研修を通して、「Key Girl」の資質のみならず、1 人の人間として大きく成長するような機会を提供することを目的とする。

2 研修概要

i 日程 : 2019 年 12 月 23 日（月）～ 12 月 29 日（日） 6 泊 7 日（機内泊 1 を含む）

ii 研修場所 : カンボジア（プノンペン・カンポット・シェムリアップ）

iii 研修参加者 : 高校 2 年生 10 名

※ ただし、今年度は参加者決定後、1 名が体調不良により辞退。

iv 引率 : 教諭 2 名

3 研修参加者選抜方法

i 公募 : 7 月 5 日（金） 地域協働事業（グローバル型）説明会を実施。

ii 提出書類 : 参加申し込み書、同意書、志望理由書（800 字以上）、英語力を証明する書類（写し）。提出期限を 7 月 26 日に設定。

iii 選考方法 : 「総合的な探究の時間」における活動実績、志望理由書、英語力を総合して、校長・副校長・教頭を含む教育改革推進事業運営委員会にて選考、8 月上旬に決定。
※ 今年度は 24 名が応募。

4 事前研修

i 調べ学習

研修参加者で相談のもと、カンボジアに関しての調べ学習を実施する。保護者同伴のもとで実施する海外研修説明会で発表・共有。今年度は、クメール語・カンボジアの歴史・カンボジアと日本との関係・カンボジアの教育環境などのテーマに取り組んだ。

ii 現地高校生と事前交流

現地シスター（本学の海外交流アドバイザー）の紹介により、現地のカトリック校である聖フランシスコ高等学校と交流活動を行うが、今年度は協働探究活動を実施するために、Facebook に付随する「Messenger」アプリを用いて事前にオンライン交流を2週間に1度、時差があるため、18:30 から1時間、計4回実施し、事前交流を実施するとともに、現地高校生が課題として認識していることを調査した。

iii 現地小学校における特別授業の準備

現地シスターは、本学の経営母体である「ショファイユの幼きイエズス修道会」のカンポット共同体に所属しており、周辺の村々にも幼稚園や小学校を建設し、運営している。そこで、研修訪問時にはカンボジアで実施できないような授業を50分×2コマ実施してほしいとの依頼を受けた。参加生徒たちが現地の教育環境を調査して、今年度は以下の2つの授業を企画実践した。

- ・ ビニール製の傘袋を利用したロケットを作る授業（図工・理科）

現地の学校では、十分に教材が整っておらず、実験や体験を伴う授業を行うことができていない。そのため、工作の楽しみとともに、空を飛ぶ仕組みを学ぶために、ビニールの傘袋に紙の翼をつけてロケットを作る授業を考え、準備した。

- ・ 日本の文化「書道」を紹介する授業（社会・国語）

せっかくの機会なので、日本の文化を伝えたいと思う気持ちから、幼少から書道を学んできた生徒を中心に書道を実際に体験してもらいながら日本の文化を伝える授業を考え、準備した。

iv 担当旅行会社による説明会の実施

研修に備え、11月9日（土）に保護者同伴で、説明会を実施。研修の行程、気候や注意すべき現地文化等の情報提供を行う。その後、引率教員から必要な持ち物や各種の注意事項などの連絡を行う。

v 募金活動の実施

現地で活動するシスターが子どもたちの教育環境をよりよいものにしたいと切望しながらも、金銭面の不足で実現できていないことを知り、体育祭で募金を呼びかけた。5万円近くの募金を集め、現地のシスターに届けた。

vi 未使用文具の回収活動

現地の小学校で学ぶ子どもたちに文具が不足しているということを知り、各家庭で使われないまま眠っている未使用文具を回収する活動を行った。チラシを作って全校に呼びかけ、多くの文房具を現地に届けた。

5 プログラム詳細

月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月23日（月）	7:30	関西空港集合	プノンペン
	10:30	関西空港出発	
	14:20	ベトナムホーチミンにて乗り継ぎ	
	15:45	ホーチミン出発	
	16:40	プノンペン到着	
		プノンペン市内にて夕食	
	19:30	「Amazing Cambodia」にて調査活動	

- ・ イオンモール内でカンボジアのお土産店「Amazing Cambodia」にて洲脇佳世さんよりヒアリング。「Amazing Cambodia」はカンボジアの物品販売だけでなく、現地の女の子の芸術的センスを活用し、自立した生活を送ることができるようにする「Dream Girls Project」という社会貢献活動を行っている。



月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月24日（火）		朝食	カンポット
	9:00	「クラタペッパー」にて調査活動	
	10:30	「SANCHA294」にて調査活動	
		昼食	
	12:30	キリングフィールド見学	
	15:30	チョンケリー村にてクリスマスミサに参加	
		夕食	
	19:00	チョンケリー村にてクリスマス祭礼に参加	
	21:00	カンポット到着	

- ・ 胡椒の栽培・販売を行う倉田浩伸さんよりヒアリング。「クラタペッパー」はカンボジア内戦で衰退してしまったかつてのカンボジアの名産品であるカンボジアペッパーを復興させた。
- ・ カンボジアにおいしいパンをという心でパン屋「SANCHA294」を経営している奥田真理子さんよりヒアリング。生徒たちと年齢も近く、ロールモデル的な存在となる。
- ・ 12月24日はクリスマスイブであり、カンポット周辺のチョンケリー村で行われるクリスマスのイベントに参加をすることになっていたが、当日プノンペンでの渋滞に巻き込まれ、現地到着が遅れ、クリスマスミサに参加することができなかった。今回の引率教諭の1名がシスターであったこともあり、急遽1時間以上をかけ、カンポット周辺にあるケップという都市まで移動し、クリスマスミサに参加した。



月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月25日（水）		朝食	カンポット
	9:00	カンポットの小学校にて小学生を対象に授業を実施	
		昼食	
	13:00	文化センターにて英語を学ぶ高校生と交流	
	17:00	カンポット公設市場にて調査活動	
		夕食	

- ・ 事前準備をしたビニールの傘袋を用いたロケット作成と書道の授業を実施した。
- ・ 現地シスターが子どもたちの学習支援として実施している英語指導に参加している生徒たちと交流活動を行う。
- ・ 交流終了後、カンポットの市場などの調査活動を行う。

月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月26日（木）		朝食	シェムリアップ
	6:30	カンポット出発	
	8:30	チョンカチアン村「平和の村」にて調査活動	
	9:30	聖フランシスコ高等学校にて交流活動	
		昼食	
	13:00	チョンカチアン村出発	
	16:00	プノンペン到着	
		夕食	
	18:30	空路にてシェムリアップへ移動	
	20:00	シェムリアップ到着	
		ナイトマーケットにて調査活動	

- ・ 「平和の村」はベトナム戦争時に散布された枯れ葉剤の影響で障害をもって生まれた方々や、エイズ罹患者などが自立した生活を行うことができるようにするための福祉施設である。
- ・ 聖フランシスコ高等学校では、事前に交流をしていた現地の生徒たちと直接会って交流活動を行った。さらに、現地の生徒から事前に日本の交通ルールに関して質問を受けていたので、その回答として日本のバイク運転とヘルメットの着用の重要性についてプレゼンを行う。



月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月27日（金）		朝食	シェムリアップ
	9:00	シェムリアップ郊外のゴミ山にて調査活動	
	11:00	クマエにて調査活動	
		昼食	
	13:30	むつみ日本語学校にて交流	
	16:00	キャンディーアンコールにて調査活動	
		夕食	

- ・ 現在立ち入りが難しくなっているゴミ山に入り調査活動を行い、ゴミ山で現金化できるゴミを捨てる人たちの様子を目の当たりにする。また、環境省の職員からヒアリングを行い、ゴミ山およびゴミ山でゴミを捨て現金化する人々の存在が一概に悪いとはいえない難しい現実を知った。
- ・ ゴミ山で生活している人たちに安定した雇用と給与を保障して、ゴミ山の生活から抜け出させようとバナナペーパーを作り、雑貨等を作成する「クマエ」にてヒアリング。また、偶然「トビタテ！留学 JAPAN」を使い、クマエでたった1人インターンシップを行っている大阪教育大学平野校舎の高校2年生の生徒と出会い、大きな刺激を受けた。
- ・ 「むつみ日本語学校」とはカンボジアの子どもたちに日本語を無償で教え、日本語を活かして未来の可能性を提供したいという意志のもと運営されている日本語学校である。生徒だけでなく引率教員もこの日の授業の中に混ぜていただき、日本語を教えたり、クメール語を教えてもらったりという体験をした。本学は、学習指導だけでなく、生活指導も厳しい学校で、生徒たちの心の奥底にはそのような自分たちの学校生活に窮屈感を感じていたが、檜尾睦先生の厳しい指導に食らいつき、「生きる」ために学ぶ現地の学生たちの姿を「美しい」と感じ、そこから自分たちを振り返るという非常に貴重な体験となった。
- ・ カンボジアで現地の人を育成し、日本伝統の金太郎飴の製造・販売を行う「キャンディーアンコール」を運営しながら、同時に近隣の村々の人々に適切な医療を受けることのできる制度を作ろうとしている社会活動家の西えり子さんと、日本では主婦でありながら看護師として働きつつ、今回1年という期限を設け、家族と離れカンボジアで日本語教師として働く安達恵理さんからヒアリングを実施。純粋に自分の心に従う姿を学んだ。



月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月28日（土）		朝食	機中
	9:00	アンコール・トム見学	
	11:00	タプロム遺跡見学	
		昼食	
	13:30	アンコール・ワット見学	
	17:00	アンコール小児病院にて調査活動	
		夕食	
	21:35	シェムリアップ出発	
	22:55	ベトナムホーチミンにて乗り継ぎ	

- ・ 現地最終日は、アンコールワット遺跡群を訪問し、カンボジアの歴史を学んだ。
- ・ 全世界から寄付を募り、カンボジアの子どもたちに無償で質の高い医療を提供するアンコール小児病院の体制についてヒアリングを行った。



月 日	時刻	内 容	宿泊地
2019年12月29日（日）	0:05	ホーチミン出発	/
		機内にて朝食	
	6:30	関西空港到着	
	7:00	関西空港にて解散	



6 事後研修等

i 合同カンボジア研修研究会への参加

a 目的

同じカンボジアをフィールドに海外研修を実施している学校が、カンボジアにおけるそれぞれの学校の学びを共有することを目的とする。

b 幹事校

昭和女子高等学校 ※地域協働事業（グローバル型）校

c 期日

1月11日（土）13：30 ～ 12日（日）13：00

d 研修場所

国立オリンピック記念青少年総合センター

e 参加校（本学以外）

広島女学院中学高等学校（SGHI期校）

岡山学芸館高等学校（SGHII期校）

啓明学園高等学校（SGHアソシエイト校）

f 参加者

本学海外研修参加者9名より3名を選抜して参加。 ※参加生徒による推薦

g スケジュール

月 日	時刻	内 容
2020年1月11日（土）	13:30	受付
	14:00	開会
	14:10	アイスブレイク
	14:30	各校研修内容プレゼンテーション
	15:50	基調講演（昭和女子大学米倉雪子先生）
		夕食
	18:30	全体会（グループワーク）
	21:00	諸連絡・入浴
2020年1月12日（日）	7:30	起床・朝食
	8:50	全体会（ワークショップ）
	10:30	発表
	11:30	閉会
		昼食
	13:00	解散

h 成果

他校の学びからさらにカンボジアに対する理解を深めただけでなく、他校の生徒との協働活動を通して、他校生の思考力・表現力等に大きな刺激を受ける貴重な学びを得た。

i 次年度に向けて

次年度は本学が幹事校となることになった。

ii 校内における成果発表会

a 目的

海外研修における貴重な学びを振り返り、改めてそれぞれの学びを深めつつ、校内で共有するとともに、次年度以降、自らも参加したいという気持ちを持ち、応募しようとチャレンジする生徒を増やすことを目的とする。

b 内容

学年末試験終了後の全校朝礼の際に体育館で、海外研修の成果を参加者全員で発表する。

※ ただし、今年度はコロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため実施できなくなったため、現在動画を作成し、HPで視聴できるようにするべく準備をしている。



7 海外研修を振り返っての参加生徒のレポートより

・カンボジアで活躍する日本人の方のお話を聞いて

「支援のあり方」についてのお話を聞いている中で、物品を届けるというよりも、その土地に適するものを作ったり、その土地に住んでいる人の特徴に合わせて物を作ったりするという形の支援があることに気がきました。この気付きは今後のクラブ活動で十分にいかそうと思いました。

また、「行動力」についてのお話で、「考えてやらないよりやるのが大切」「自分がやりたいことをやる」「失敗は悪いことじゃない」といった言葉がとても心に刺さりました。私は、性格上、自分より周りの人のことを優先することが好きで、基本的にはそれで満足なのですが、どうしても自分のやりたいことがあっても、そのことによって嫌な思いをする人が出てくるかもしれないと思い、考え込んで、結局やらずに後悔することが多々ありました。また、失敗を恐れて行動してこなかった経験と重なることもあり、とても印象深かったです。高校3年生への進級を控え、このよ

うなことについて考える機会が多かったので、この時期に聞けてうれしかったです。今すぐに、自分のやりたいことを優先することは難しいかもしれませんが、これから学校生活を送っていく中で、教えていただいた言葉を心に留めて行動することを心掛けようと思いました。

- ・ 小学生への授業を通して

自分は英語が苦手で、とても不安を感じていた。しかし、簡単な英語やジェスチャー、笑顔で思いを伝えることができることができた。また、私たちが普段何気なく思っていることにも興味を示し、積極的にコミュニケーションをとろうとしてくれていた。子どもたちの笑顔や行動力に、自分たちが教えているはずなのに、反対に励まされた。

小学生を相手に授業が成立するのかとても不安だった。書道の授業では、墨汁が入っているコップに手を入れてこぼしてしまうなどのハプニングもあったが、子どもたちが楽しそうに取り組んでくれたことが何よりもうれしい。

授業が終わった後に学校で集めた文房具を配ったが、自分が何個文房具をもらえたかにこだわっている子どもがいて、その様子には正直心が痛んだ。そんな気持ちを持つような環境なんだなとしみじみ感じた。私たちは文具がなくなれば、すぐ買えるし、そんなことは当たり前だと思っていた。しかし、それは当たり前ではないことを思い知らされた。自分で選んで生まれてきた訳ではないのに、生まれた場所でこんなに差ができるという現実は圧倒的だった。これからはせめて前向きに勉強しないとあの子どもたちに申し訳ないと感じた。

- ・ むつみ日本語学校について

日本語学校生たちの勉強に対する姿勢に、とても感銘を受けた。「生きるために学ぶ」、この概念は、初めて知り、肌で体験することとなった。私が担当させていただいたグループは、クラス内でもあまり成績が芳しくないそうだ。国語の教科書をすらすら読めるようにして欲しいと頼まれ、不安いっぱい日本語を教えることになった。彼らは、「生きるために学ぶ」、その名の通りの姿勢で、私の発音を必死に真似していた。彼らの姿勢から、学ぶことの大切さを改めて自覚することができた。

むつみ日本語学校で学んでいる学生の、物事に向き合う姿勢が、本来私たちも身に付けておくべき姿勢であると思い、本当に大きな刺激をもらったと感じている。

まず、私たちが学校の中にお邪魔させてもらう時の歓迎ムード、授業開始時のお辞儀、暗唱や歌を発表するときの音量、常に感心させられる立ち居振る舞い、そして日本語に向き合う姿勢、これら全てに感動しました。私の思いを適切に表現できているとは思えませんが、本当に「美しい」と感じました。彼、彼女たちはむつみ日本語学校で「日本語」を学んでいるだけでなく、「生き方」についても学んでいるんだろうなと感じた。また、私は、むつみ日本語学校がとても心に刺さったので、帰国後、むつみ日本語学校について調べ、Facebookを見たが、Facebookにアップしている画像一枚ずつにコメントが書かれており、檜尾先生が生徒たちと真剣に向き合っており、また、先生からの愛を生徒たちも感じているからこそ、あのような素晴らしい姿勢が身に付いたのだと思った。私達も日々の学校生活に不満ばかりを持つのではなく、もっと受け止めるべき思いがあるのではないかと考えさせられた。

- ・ これからの自分に繋がりたいこと

「英語を学ぶ」ということのモチベーションがあがったように思います。今までは問題に答えるための英語を学んでいるという思いしか持てませんでした。今回これだけ多くの人と英語で話すことで、思いを伝えたいという気持ちを持ちました。思いを伝えるために英語を学びたいという気持ちになったことをこれから先の学びに繋がりたいです。また、同時に諦めずに伝えようとする力が私には不足していると思いました。それは一緒に研修に行った仲間たちから学んだことです。

物事の背景を見たり、思いを馳せる力を身につけたいと思いました。研修前はゴミ山など早くなくせばいいのという考えを持っていましたが、それがいかに単純で表面しか見ていない考えであるかということを感じました。社会課題は様々な要素が複雑に絡んでおり、簡単には解決できないということを感じることができたのは、自分にとってとても大きな経験です。

今回勇気を出して応募して本当に良かったと思います。中学生のころは、全く積極性がなかったのですが、海外研修に参加したいと思うようになってから、常に何事にも積極的に行動することを意識してきました。この海外研修は私の人生にとって本当に大きな出来事だったと思います。今回のことだけで終わらせるのではなく、これからもこのような経験を積み重ねたいと思います。

この研修は希望する人が全員行けるわけではないので、その子たちの分も学んでいきたいと思っていました。本当に「心の持ち方」から考えさせられる一週間でした。

- ・ 自分の将来について

この研修を通して、もっと自分のことを大切にしないといけないと感じました。人生は一度きりだから。後悔をしないように自分で自分の人生を作らないといけないと感じました。これまでの時間は戻せない、納得するまで考え、時には人にも相談しながら最高の人生を送りたいと強く思いました。将来については、まだ何も決まっていますが、自分自身で決める、これだけは絶対にやりたいと思います。今回の研修では、「働き方」についての考えを広げられました。長い人生なので、仕事をしながらでも、違う分野のことに足を踏み入れることもできるからです。キラキラと目を輝かせながら自分の人生を語れる大人になりたいです。

そのためにも、今の環境は「当たり前」ではないということ、自分に関わってくれる方への感謝の心を常に持ちながら今を必死で生きたいと思います。

もともとボランティア活動に興味があり、将来はJICAに参加したいと思っていたが、今回の研修でその思いがより強くなった。その中で、支援者が与えたものから受益者自身が何かを生み出せるような支援を行うことのできる人になりたいと思った。受益者が支援に頼りきりになってしまうような支援はしたくないと思った。

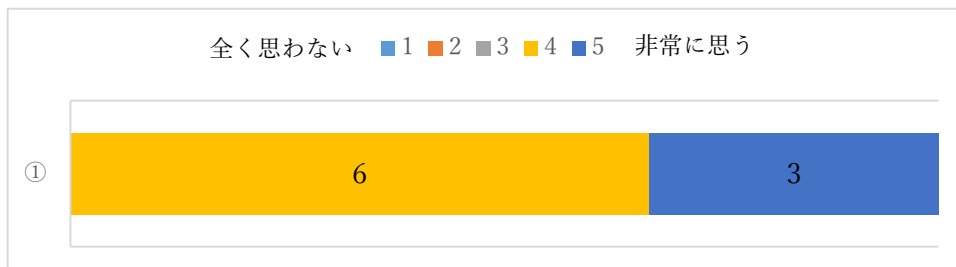
以上のように、今回の海外研修は参加した生徒に対して、様々な点で大きな刺激を与えることができたと思う。本事業と海外研修との関係性については指摘を受けているが、カンボジアでの衝撃は、参加生徒の人としての本質的な部分に多大な影響を与え、将来地域や世界などにおいて奉仕の心をもって貢献できる人材へと成長させる研修となっていると感じている。次年度は、海外交流アドバイザーとともに連携を深め、さらに衝撃を与える研修へと発展させていきたい。

8 事後アンケートの集約

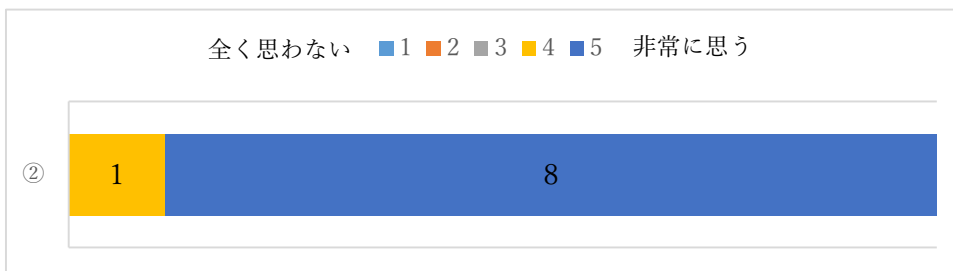
海外研修における学びの効果を測定するためアンケートを実施した。以下にその結果を述べる。なお、数字の単位は「人」とする。

○質問項目

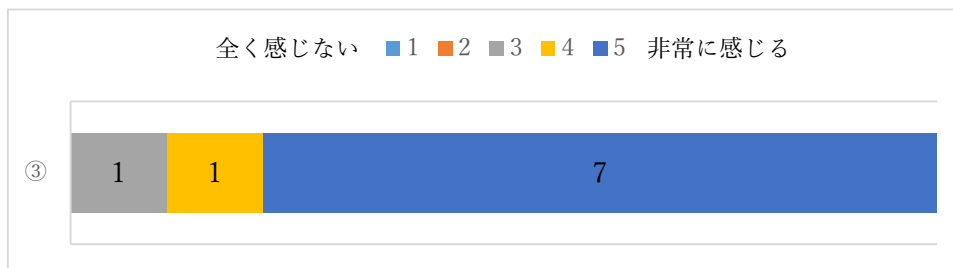
- ① 海外研修を通して、将来「地域」の課題解決のために尽力したいと思うようになりましたか。



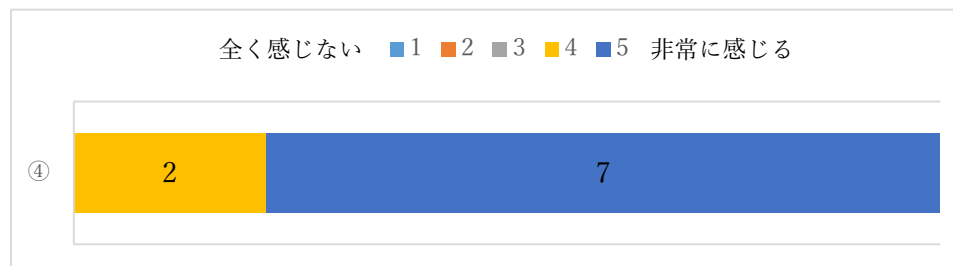
- ② 海外研修を通して、以前よりも社会のために奉仕・貢献できる人になりたいと思うようになりましたか。



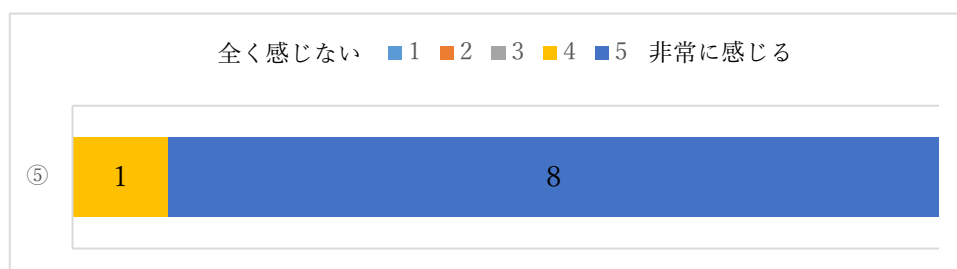
- ③ 海外研修を通して、以前よりも他者と協働することの大切さを感じるようになりましたか。



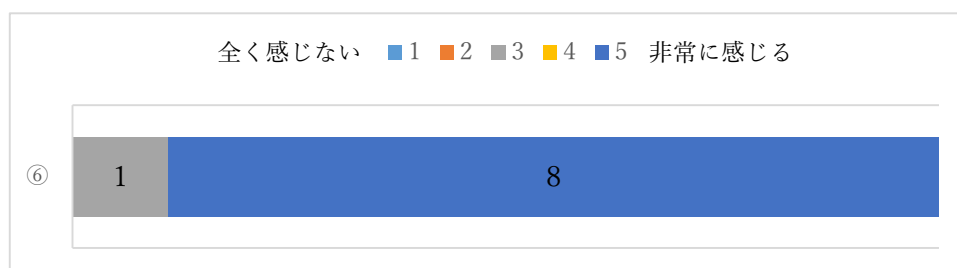
- ④ 海外研修を通して、以前よりも英語を学ぶことの重要性を感じるようになりましたか。



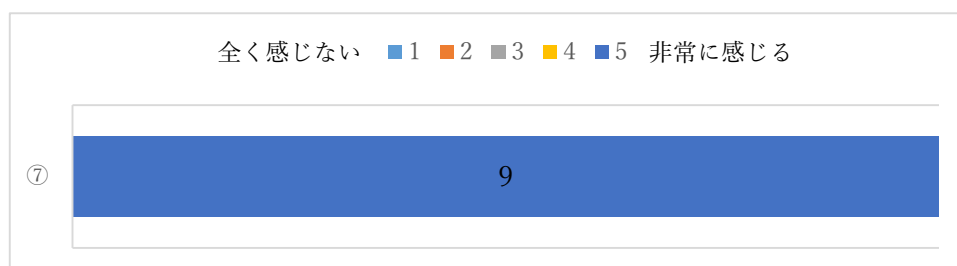
- ⑤ 海外研修を通して、以前よりも新しいことや難しいことにチャレンジすることの重要性を感じるようになりましたか。



- ⑥ 海外研修を通して、以前よりも答えが一つではない課題に取り組むことの重要性を感じるようになりましたか。



- ⑦ 海外研修を通して、何らかの志を持ってこれからの人生を歩んでいくことの重要性を感じるようになりましたか。



B 「全国高校生フォーラム 2019」への参加

1 目的

S GH、WWL 及びグローバル型を広く普及し、各事業のより一層の推進を図るため。

2 主催

文部科学省、国立大学法人筑波大学

3 日時

12月22日(日) 9:00 ~ 16:30

4 会場

東京国際フォーラム

5 内容

- ・ S G H指定校、アソシエイト校、WWL校、地域協働事業（グローバル校）の代表生徒が一堂に会し、グローバルな社会課題研究についてのポスターを掲示し、各ポスターの前で参加者・審査委員に対し説明と質疑応答を英語で行う
- ・ 参加校の中から、審査委員会の審査によってステージ上で発表する優秀校4校が選出される。
- ・ 優秀校4校のステージ上での発表について最終審査委員会による審査を行い、1校に文部科学大臣賞、3校に審査委員長賞を授与する。
- ・ その他、審査委員特別賞および生徒投票賞を授与する。
- ・ 生徒交流会では、分科会で「貧困」「健康」「福祉」「医療」などをテーマにして、小グループに分かれて、英語で議論を行う。

6 本学参加生徒

高校2年生 3名

※ 「グローバル探究」のポスターセッションで教員からの評価が高かった班を選出。

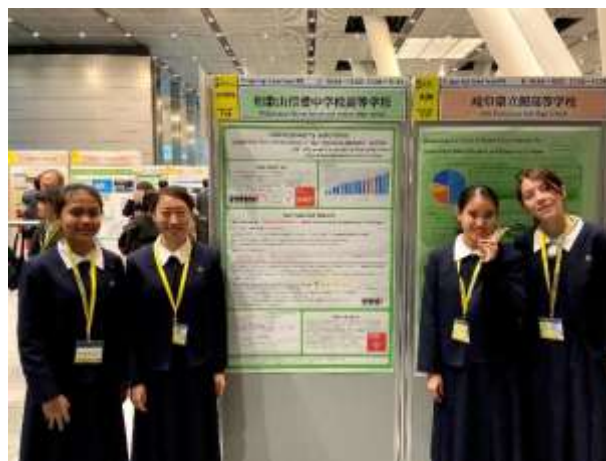
7 提出書類

i テーマ・要旨

「Child poverty solutions : Examining the effectiveness of the " Kodomo shokudo " system」

"When I was in elementary school, one of my classmates always wore the same clothes to school every day. I couldn't forget about him, so I suggested to my team that we investigate issues affecting child poverty.

One solution gaining popularity is the ""Kodomo shokudo"", or ""Children's cafeteria"". These cafeterias offer free food to children, and have become more common. After visiting our local children's cafeteria, our team thought of some ways it could be more effective, and so we are proposing a new style of ""Kodomo shokudo"", that can work both in and outside Japan."



Child poverty solutions

Examining the effectiveness of the “Kodomo shokudo” system

G1915: Wakayama Shin -ai Junior and Senior High School

Key words: Child poverty / Kodomo Shokudo /After school care

1. Introduction

Japanese poverty for children under the age of 17 has been gradually decreasing from 16.5% in 2005 to 13.5% today. However, this still means that one in seven children is poor. Japan is ranked at 7th in the OECD from this result, and the level is quite high. Additionally, America and Spain are also included in those countries that have high levels. From these results, it is clear that poverty exists not only in developing countries, but also in highly developed countries as well. It is urgent to start thinking of this problem in society since children are not responsible for their situation, unlike adults.

2. Methods and Results

[Field work and Interview survey] We conducted field work and an interview survey. We focused on “Kodomo Shokudo”, which is now rapidly spreading all over Japan. We asked questions to the people who work in Kodomo Shokudo and did some interviews while volunteering there in summer vacation. We found that Kodomo Shokudo satisfies not only the children’s hunger, but also supports them mentally. However, we also found some problems. For example, their budget is insufficient, causing volunteer staff to use their own money. Also, not all children who really need the service are taking advantage of it.

It is necessary to have help from older people in neighborhood to solve these problems. We asked questions to our grandparents and examined the results. It appears that elderly people often look for a new challenge after retiring, so they showed a positive attitude to helping children in their neighborhood. However, we have to consider their physical condition and payment.

[Survey] We also need help from elementary schools nearby to assist our solution. We asked to our teachers to fill out our questionnaire. Based on the results, we found that not so many teachers knew about Kodomo Shokudo.

[Action] We still have not finished the collection and the examination of the results, but we want to present our solution to our local government and get feedback from them.

3. Conclusion

We want to present our idea to combine both “after school care” and Kodomo Shokudo. There is a service called “Wakatake Gakkyu” in public elementary schools in Wakayama city to help working parents. We came up with an idea to create a new service by adding Kodomo Shokudo service to Wakatake Gakkyu to support more children.

This new service has many benefits. It is possible to support regions equally since elementary schools are situated evenly throughout society. Schools usually have a kitchen, so it's easier to make food for children. By cooperating with schools, collecting the information of children who need help would be easier and more accurate. Combining Kodomo Shokudo and “after school care” will make the users not seem like poor children. Support from OBs, donations from the public, and gifted food from restaurants can all be more easily made using the convenience of the school. Neighborhood groups can be aligned with schools too. Of course this idea is not complete, but raising awareness of the idea is an important first step.

References

- 阿部彩 (2008) 『子どもの貧困』－日本の不公平を考える－ 岩波新書
日本財団「子どもの貧困対策」(https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/ending_child_poverty)

Child poverty solutions

Examining the effectiveness of the “Kodomo shokudo” system

G1915:Wakayama Shin-ai Junior and Senior High School

Miyai Suzuha/Kushino Aya /McGuire Sakura

Introduction

Child poverty is one of the problems in Japan lately. But it has been decreasing from 16.5% to 13.5% in 2015. However, this still means that one in seven children are poor, and Japan is ranked at 7th in the OECD from this result. This level is quite high.



Methods and Results

We focused on “Kodomo Shokudo”, which is now rapidly spreading all over Japan.

[Field work and Interview survey]

- ✓ Kodomo Shokudo satisfies not only the children’s hunger, but also supports them mentally.
- ✗ Their budget is insufficient, causing volunteer staff to use their own money.
- ✗ Not all children who really need the service are taking advantage of it.

[Methods and Results]

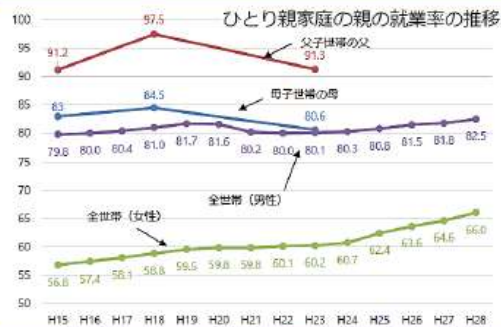
We came up with an idea to create a new service by combining the Kodomo Shokudo service and Wakatake Gakkyu to solve this problem.

- ①It’s possible to support regions equally since elementary schools are situated evenly through out society.
- ②Schools usually have a kitchen, making it convenient to prepare food.
- ③By cooperating with schools, collecting the information of children who need help would be easier and more accurate.

What will be necessary to make this idea a reality?



- Elderly people often look for a new challenge.
 - ↳ However it was pointed out to us to consider their physical condition and payment.
- The cooperation of elementary schools will be key.
 - ↳ We found some negative opinions such as problem of school management and increasing burden on teachers.



Conclusion

We found out that to improve the system of “Kodomo Shokudo” isn’t the fundamental solution. People are paying attention to child poverty, because it’s not their fault for being poor unlike adults. The Kodomo Shokudo is one way to help, but more work must be done to solve the underlying issues related to poverty.



References: 阿部彰(2008)『子どもの貧困』—日本の不公平を考える—岩波書店 / 平成 26 年度版子ども・若者白書(グラフ参照)
日本財団「子どもの貧困対策」 / 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(グラフ参照)

iv 成果

ポスターセッションでは、表彰等を受けることはできなかったが、昨年度 SGH アソシエイトとして参加した「2018 年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム」よりは質疑応答で成長が見られた。昨年度は、緊張もあり、質疑応答が特に上手いかなかったが、今年度は昨年度よりもかなり向上した印象を受ける。また、当日会場に京都大学の先生が来場していたが、発表後に「信愛の生徒さんはやらされているという印象がなく、楽しそうに発表をしていますね」と評価していただいたのは非常にうれしいことであった。

また、参加生徒のうちの 2 名は比較的大人しい生徒であり、自らこのような場に参加する生徒ではない。しかし、このような機会を得て、さらに積極的に調査活動に励んだり、英語での発表のために時間をかけて準備を重ねたりした。他校と比較すると探究活動の深さとしては浅いのかもしいが、生徒の成長という点では非常に大きな伸びが見られたと思う。

v 次年度への課題

学内でも東京で、英語を用いてポスター発表と質疑応答を行う本フォーラムへの注目度は高まっており、自分も参加したいと考えている生徒は増えているため、今後選考段階でより質の良い探究活動を行っている班を選出することができると思う。しかし、過去 2 年の参加において、他校の生徒と比較すると「積極性」や「課題解決力」、「表現・発信力」などでまだまだ見劣りするの事実である。次年度は、本事業の 1 期生が参加することになるため、2 年生の前半で英語での「表現・発信力」を強化しておきたいと考えている。

C 英語運用能力向上プロジェクト

1 目的

本事業のグローバル型として、英語力の向上は必須であると考え、「英語運用能力向上プロジェクト」を実施する。すでに本学は地域の中では「英語の信愛」という評価を受けているが、これまでは大学入試のための英語という側面が強かった。そのため、本事業においては、英語の「表現・発信力」の向上を意識し、特に「リスニング」「スピーキング」の 2 技能に注力する。

2 実践

i オンライン英会話授業（高校全生徒）

タブレット端末を用い、高等学校の全クラスの生徒が週に 1 コマ、フィリピンとオンラインで接続した「オンライン英会話授業」を実施した。



ii Advanced Communication Program (希望者)

夏期休暇中の7月29日(月)から8月2日(金)の5日間、校内にて海外からの留学生などを本学に招き、希望者を対象に短期集中型の語学プログラムを実施した。



iii ニュージーランドおよびカナダの語学研修(希望者)

ニュージーランドは8月6日(火)から8月15日(木)、カナダは8月6日(火)から8月20日(火)の日程でそれぞれ語学研修を実施した。



iv アジア高校生架け橋プロジェクト2期生の受け入れ

カンボジアよりチョーン・チャンラタナックさんを8月23日(木)から※2月29日(土)まで受け入れる。本学の生徒4名の家庭にホストファミリーをお願いした。

※本来は3月22日(日)までの受け入れであったが、新型コロナウイルス感染拡大防止による休校措置により2月29日までの受け入れとなり、3月9日(月)に帰国した。



v トビタテ！留学 JAPAN 第 5 期生

高校 2 年生が 9 名、高校 1 年生（中学 3 年生段階で応募）5 名が応募。うち 4 名（高校 2 年生が 2 名オーストラリア・カナダ、高校 1 年生が 2 名カナダ）が合格し、留学を実施。



vi 「英語で学ぶ」授業開発

アジア高校生架け橋プロジェクト生を受け入れたクラスで国語・化学・物理・書道・音楽・体育等の授業を実践した。しかし、体系的な実施とはならず、通常の授業を英語で実践するという授業が展開され、誰もが実施できる形の教材化までは進むことができなかった。

3 英語外部検定の受検状況

i GTEC

GTEC		B2	B1	A2	A1	計
高校1年生	Advanced	—	8	52	1	61
	Basic	—	1	88	72	163
高校2年生 (1回)	Advanced	—	23	145	3	171
	Basic	—	0	6	75	81
高校2年生 (2回)	Advanced	—	23	145	4	172
	Basic	—	0	29	50	79
高校3年生	Advanced	—	27	144	6	177
	Basic	—	0	18	49	67
GTECCBT		B2	B1	A2	A1	計
高校2年生		1	3	4	0	8

ii 英語能力検定

第1回		一次受験	合格	二次受験	合格
高校1年生	準1	1	0	-	-
	2	8	2	3	1
	準2	52	12	15	10
	3	8	8	9	9
高校2年生	準1	16	0	-	-
	2	107	33	37	23
	準2	51	7	12	10
	3	3	1	1	1
高校3年生	準1	1	0	-	-
	2	90	29	32	25
	準2	40	12	16	13
	3	-	-	-	-

第2回		一次受験	合格	二次受験	合格
高校1年生	準1	-	-	-	-
	2	9	5	10	4
	準2	31	15	33	13
	3	33	23	36	16
高校2年生	準1	2	1	2	1
	2	44	18	52	15
	準2	42	19	43	14
	3	17	11	18	11
高校3年生	準1	-	-	-	-
	2	28	8	38	14
	準2	19	5	25	8
	3	-	-	-	-

※ 二次受験者の中には、一次免除者を含む。

※ 第3回の受検は学内で実施せず、個人での申し込み・受検となる。

D 学内での出前授業

i 目的

学内での学び以外にも学外の方を招き、様々な角度からの講義を受けることで、さらに生徒たちの学びを深め、学外のプログラム等に積極的に応募することが当たり前という空気を醸成することを目的とする。

ii 実施した出前授業

- ・ 第3回和歌山県データ活用コンペティションにむけての出前授業

日時 : 6月17日(月) 17:30 より

参加者 : 108名

講師 : 和歌山県企画部企画政策局企画総務課 遠北 さん

内容 : 和歌山県データ活用コンペティションへの応募の際のポイントについて

- ・ 創造力無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ出前授業(第1回)

日時 : 6月19日(水) 17:30 より

参加者 : 118名

講師 : 日本政策金融公庫 国民生活事業本部 大阪創業支援センター 向笠 大樹 さん

内容 : 高校生ビジネスプラン・グランプリへの応募とプランの考え方などについて

- ・ 創造力無限大∞高校生ビジネスプラン・グランプリ出前授業(第2回)

日時 : 8月23日(金) 15:00 より

参加者 : 14名

講師 : 日本政策金融公庫 国民生活事業本部 大阪創業支援センター 向笠 大樹 さん

内容 : ビジネスプラン・グランプリ応募予定班へのアドバイス

iii 成果

年度末に実数を測定しようと考えていたため実施はできていないが、明らかに各種の外部プログラムへチャレンジする生徒が増えた。



E 運営指導委員の先生方による特別講演

1 目的

本事業の採択に向け、運営指導委員を引き受けてくださった平山恭子さん、渡邊道子さんの両名は、以前から本学の教育内容の変革を応援してくださっていた方で、本学の生徒たちにとってロールモデルとなるすばらしい方々である。その方々のお話を伺うことで、1人の女性として社会でどのように生きていくかということを考えるきっかけや材料を提供することを目的とする。

2 実施日時

- ・第1回 10月31日(木) 8:50 ~ 9:40 平山恭子さん
- ・第2回 2月13日(木) 8:50 ~ 9:40 渡邊道子さん

3 参加生徒

高校1年生、高校2年生

4 成果

平山さん、渡邊さんのお話は生徒に大きな刺激を与えるものとなった。講演の感想では、「平山さんがおっしゃっていたように、今まで大人たちから「新たな価値を生み出すことが大事、そういう力が求められている」と言われても確かに実際どういったことをすべきか分からなかった。でも、今回平山さんの課題解決における3段階のお話を聞き、今の自分の状態から目標とすべき状態まで理解できたし、考え方も変わった。このお話を聞いて、私は今回の探究活動で確かに達成感があったけれど内容的には「解決」ではなく「対処」だったのでと考え直すこともできた。私も社会人になった時、平山さんのように、人をたくさん巻き込んで影響を与える人になりたいと思った。傍観者ではなく自分で行動に移して色々経験して自分で自分を作っていきたいと思った」(平山さんの講演)や、「私が印象に残っているのは、『進路は選ぶものではなく作るものだ』という言葉です。与えられたルールの上を進むのではなく、自分で切り開いていくことが大切だと改めて気づくことができました。また、渡邊さんが入試企画部の課長として働きながら、学生として学んでいることに驚きました。時代が急速に変化するなかで、過去に学んだ知識では無理だと感じ、今現在の知識を学ぶということをしなければならないと思いながらも、実際に行動に移すことのできる人はなかなかいないと思います。これからは生涯学ぶ姿勢が大切だと思いました。そして、渡邊さんは『答えはたった一つではないので、「納得解」や「最適解」を導く力を身につけることが必要だ』とおっしゃっていましたが、その力を身につけるためには、今実際に行っている探究活動が大切だということがよく分かりました」(渡邊さんの講演)などとお二人から多くのことを学んだことが分かった。

F 先進校視察

1 目的

本視察においては、本事業（グローバル型）やSGH校における研究開発の進め方に関する手法を学ぶことを目的とする。

2 視察先

昭和女子大学付属昭和中学校高等学校

3 視察者

和歌山信愛中学校高等学校教育改革推進事業運営チーム2名の教員

4 視察先概要

昭和女子大学付属昭和中学校高等学校は、2019年度に本学と同様、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の20校の1つとして採択を受けるが、実はすでに2014年度からSGH1期校として指定を受けており、探究活動の歴史は長い。生徒数は高校が565名、うち434名が本事業の対象生徒である。「世の光となろう」という建学の精神のもと「伝統と先進を融合させ、グローバルリーダーを育てる」をスローガンにグローバル教育を推進している。本学がSGHアソシエイト校時代から担当者レベルで交流があり、同じ私立女子校で学びの環境に共通点も多いことから、この度視察を依頼した。

5 日時

2019年6月29日（土） 9:00～12:00

6 内容

i 教頭先生からのお話

岡野内理恵教頭先生より本事業の概要・運営、SGH校としての探究活動の蓄積についてお話を伺う。

ii 教育研究主任からのお話

本事業の担当者でもある勝間田秀紀教育研究主任より本事業の取り組み内容、カリキュラムマネジメント進捗状況等を説明いただく。また、本学の事業内容に関しても質問いただき、充実した意見交換となった。

iii 授業見学

勝間田教育研究主任の公民の通常授業を見学。ICT環境を活用し、生徒からの発信も多い充実した授業を展開していた。

7 成果

事前の印象では、昭和中学校高等学校は東京都世田谷区という充実した都市環境のもとにキャンパスを構えており、地域課題とは無縁ではないかと考えていたものの、成熟期にある都市型社会は、「住民の

高齢化」や「外国人との共生」など多くの課題を抱えており、それをテーマに探究活動を推進していることが分かった。「ローカル」と「グローバル」をクロスさせながら探究活動を実践しようとする手法は本学と同様であるが、教科横断型の学習によってすでに探究活動と教科の学習がリンクしており、手本にすべき点が多い。本学も担当教員に過度な負担をかけることのない効果的な手法で有機的な連携を図っていく必要性を感じた。

また、同じ女子校でありながらも、1年間の海外留学などの成果か生徒たちは非常に活発で積極的である。カトリック教育を通して「賢い女性」を育成することを目標とする本学ではあるが、「一歩下がって…」という姿勢が悪い形で表面化してしまうことがある。「外向き」の人間性の育成について導入していく必要性を感じた。



⑧ 来年度に向けて

1 高校2年生「グローバル探究」の完全実施

すでに今年度1月のガイダンスからスタートしているが、高校2年生を対象に今年度4月よりスタートさせたプレ活動としての「グローバル探究」を来年度は完全実施する。

2 高校3年生「キャリア探究」のプレ実施

すでに今年度1月のガイダンスからスタートしているが、次年度の現高校1年生の完全実施に向けてプレ活動を実施する。

3 「ミニ探究」授業開発の継続

「総合的な探究の時間」に実施する本事業の運営に各教員の労力が取られ、思った以上に授業開発が進まなかった。ただし、来年度より「Classi」が導入され、年度当初こそ対応に追われることにはなると思うが、徐々に業務軽減が進んでいくと思われるため、「ミニ探究」授業開発およびカリキュラムマネジメントを推進していく。

4 合同カンボジア研修研究会の実施（幹事校として）

次年度は、今年度参加した合同カンボジア研修研究会を幹事校として開催・運営する。2021年1月9日（土）、10日（日）和歌山市立青少年国際交流センターで実施予定。

※ ただし、コロナウイルスの感染状況によっては、実施しない可能性もある。

5 英語運用能力向上プロジェクト

今年度同様各プログラムを実施していく。特に、「英語で学ぶ」授業開発は今年度の反省を踏まえ、体系的なものになることを目指す。また、GTEC、実用英語能力検定に関しては、学年・コースごとの目標を設定し、その実現を目指す。

Ⅲ コンソーシアム運営会議報告

① 第1回コンソーシアム運営会議

1 日時

2019年4月11日(木) 17:30 ~ 19:00

2 場所

和歌山信愛中学校高等学校 本館 3F ホール A

3 コンソーシアム構成機関出席者

和歌山県 … 文化学術課長 島本由美 様

和歌山市 … 和歌山市教育委員会 学校教育課 前田いさ 様

みなべ町 … うめ課主任 中早良太 様

国立大学法人和歌山大学経済学部 … 副学長・経済学部教授 足立基浩 様

公立大学法人和歌山県立医科大学 … 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 … 副学長 大山輝光 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 … 会長 堀内智子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 … 会長 細田佳世子 様

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長
和歌山信愛高等学校 校長 森田登志子

iii 出席者紹介

iv 事業内容説明 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

v 協議事項

- ・ 「リージョン探究」について
講師派遣、フィールドワーク先の紹介、日程調整など
- ・ 「グローバル探究」について
講師選定、人員派遣、日程調整など
- ・ 各種発表会について
情報告知、人員派遣など
- ・ 本事業窓口担当者の選出について

vi 今後の予定

vii 挨拶 和歌山信愛高等学校 副校長 紙岡智

viii 閉会

② 第2回コンソーシアム運営会議

1 日時

2019年8月2日(金) 17:30 ~ 19:00

2 場所

和歌山信愛中学校高等学校 本館3FホールA

3 コンソーシアム構成機関出席者

和歌山県 … 文化学術課 学術振興班長 関本愉香子 様

和歌山市 … 和歌山市教育委員会 学校教育課 前田いさ 様

みなべ町 … うめ課主任 中早良太 様

国立大学法人和歌山大学経済学部 … 副学長・経済学部教授 足立基浩 様

公立大学法人和歌山県立医科大学 … 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 … 副学長 大山輝光 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 … 理事 牛窪篤子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 … 会長 黒田美智子 様

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛高等学校 校長 森田 登志子

iii 協議事項

- ・ 「リージョン探究」について
進捗状況確認、ルーブリック評価表の協議、フィールドワークの振り返り、発表会への人員派遣、発表会の地域への告知など
- ・ 「グローバル探究」について
進捗状況確認、ルーブリック評価表の協議、フィールドワーク実践状況報告、発表会への人員派遣、発表会の地域への告知など
- ・ その他の活動について
出張授業の実施、コンソーシアム主催のフォーラム等への参加、外部プログラムへのチャレンジ状況、アジア高校生架け橋プロジェクトへの参加など
- ・ 地域協働事業の地域への浸透について
地元のマスコミ等の紹介など
- ・ 高校生を地域に還流させるシステム作りについて
高校生にインターンシップ機会の提供、システム化について

iv 今後の予定

v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡 智

vi 閉会

③ 第3回コンソーシアム運営会議

1 日時

2019年10月23日(水) 16:30～18:00

2 場所

和歌山信愛中学校高等学校 本館3FホールA

3 コンソーシアム構成機関出席者

和歌山県 … 文化学術課 学術振興班長 関本愉香子 様

和歌山市 … 和歌山市教育委員会 学校教育課 前田いさ 様

みなべ町 … うめ課主任 中早良太 様

国立大学法人和歌山大学経済学部 … 副学長・経済学部教授 足立基浩 様

公立大学法人和歌山県立医科大学 … 地域医療支援センター センター長 上野雅巳 様

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 … 副学長 大山輝光 様

一般社団法人「女性と地域活性推進機構」 … 理事 牛窪篤子 様

国際ソロプチミスト和歌山紀ノ川 … 会長 黒田美智子 様

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛高等学校 校長 森田 登志子

iii 協議事項

・ 「リージョン探究」について

進捗状況確認、ポスターセッションアドバイスシート内容、ポスターセッションの内容、最終発表に向けてなど

・ 「グローバル探究」について

進捗状況確認、ポスターセッションの振り返り、最終発表会に向けてなど

※指摘事項

- ・ポスターセッションの運営は非常に安定している。
- ・生徒によって発表の差が大きい。練習不足なのではないか。
- ・ポスターにデータ出典を明示していないグループが多い。

・ 「キャリア探究」について

内容説明など

・ その他の活動について

外部プログラムへのチャレンジ状況、アジア高校生、本事業の広報活動など

iv 今後の予定

v 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡 智

vi 閉会

④ 第4回コンソーシアム運営会議

1 日時

2020年3月12日(木) 17:30 ~

※ ただし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止とした

2 場所

和歌山信愛中学校高等学校 本館3FホールA

3 内容(予定していたもの)

i 開会

ii 挨拶

iii 協議事項

- ・ 「リージョン探究」について
今年度の振り返り、次年度の講師依頼など
- ・ 「グローバル探究」について
今年度の振り返り(高2)、進捗状況(高1)など
- ・ 海外研修(カンボジア)について
旅程、研修での学び等の報告など
- ・ 2019年度全国高校生フォーラムについて
探究テーマ、内容報告など
- ・ 「キャリア探究」について
進捗状況など
- ・ 今年度の本事業運営の総括
外部チャレンジ等の成果報告、改善点など
- ・ 文部科学省からの指摘事項
コンソーシアムの活動に対する指摘事項の報告など

iv 次年度の予定

v 挨拶

vi 閉会

IV 運営指導委員会報告

① 第1回運営指導委員会

1 日時

2019年10月30日(水) 16:30 ~ 18:00

2 場所

和歌山信愛高等学校 本館3FホールA

3 参加者

和歌山県知事 仁坂吉伸 様(代理出席)

和歌山市教育委員会 教育長 富松淳 様(代理出席)

国立大学法人和歌山大学経済学部 学部長 藤永博 様(代理出席)

公立大学法人和歌山県立医科大学 理事長・学長 宮下和久 様(代理出席)

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般財団法人Future Skills Projects 研究会 事務局長 平山恭子 様

学校法人産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊道子 様

(推進校) 学校法人和歌山信愛女学院 理事長・和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営チームの教諭 17名

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 事業内容説明および進捗状況報告 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

iv 協議事項

①「リージョン探究」について

※ 「リージョン探究」のポスターセッション参加後に運営指導委員会を実施している。

(委員より)

a ポスターセッションの運営についてはよく考えられたものだったと思う。他の学年が見学する機会があるとさらによいと感じた。探究活動に「縦」の関係を持ち込むともっとスムーズに探究の学びが蓄積されるように思う。

b 発表に対してのアドバイスシートが簡潔で書きやすくなっている。ループリックも評価のポイントが明確になっていてよいと感じた。

c アドバイスシートにはもっと意見を書きたいと感じた。さらにブラッシュアップをさせる機会を設けているプログラムであるので、ネクストアクションに向けてのアドバイスを書くことを

徹底させるとよいと感じた。

d 文部科学省からの採択を受けている以上、全国の高校の見本になるものを作っていかなければならない。その点からみても、よく考えられていると思う。ただし、他校がこの学びを取り入れるとしたら、ローカルからグローバルと一気に展開するのではなく、地域→日本の中の地域→世界の中の地域という視点が必要のように思う。地域を変える、日本を変える、世界を変えるという突き抜けが教員の指導に必要ではないか。

e このような行事をもっと地域の人に見てもらおう努力は必要だと思う。

f ルーブリックを先に提示して活動させている点が非常によいと感じた。ただし、今回の発表の形式では個人を評価するのか班を評価するのが曖昧ではないか。なお、全ての発表を聞くことはできなかったが、生徒たちは地元の活性化のために具体的な案をたくさん提案してくれていた。2020年度の和歌山市駅前開発計画についてもしっかり調べており、質問にもすらすら答えてくれた。

(学校より)

a 「学びの蓄積」は我々も意識しているところで、当初、3年目から実施する予定であった研究成果発表会を今年度から実施することにした。各学年の優秀班の発表を生徒に見せることで、目標や基準になっていくことを期待している。

c 意見を参考にして、さらに生徒たちの学びが充実したものになるように努力していく。

d 今年度の採択内定が3月末で、その段階では本学の新年度の校務分掌は決定しており、5月の事業開始まで運営チームを含む全教員で共通認識を持つことができなかった。今年度の運営を通して共通認識を高めていくことを目指している。

e 現状、地域の方に公開としているが、まだまだ注目度は低いと感じている。女子校ということもあり、安全面に配慮する必要は他の学校と比べると高いと思われるため、事前に Google フォームで応募してもらうという形を取った。なお、今回は前日にNHK和歌山放送に告知してもらうことができた。本日飛び込みで4名の方の参加があったのはその効果であると感じている。コンソーシアムの協力を得て、より地域の方に足を運んでもらえるようにしたいと考えている。

f ポスターセッションにおいては、どんな大人しい生徒でも必ず1度は発表するようという指導を行っている。アドバイスシートには「○回目の発表」と記入する箇所を設けており、発表した個人の生徒を特定できるような工夫はしているつもりである。

②「グローバル探究」について

(委員より)

a こちらの活動は、文書による報告なので具体的な部分は分からない所も多いが、課題の設定方

法に不安を感じる。自由に課題設定を行うということは「課題発見力」を育成するという部分でも大切なことだと思うが、ある程度の共通認識は必要である。特に、「グローバル探究」はSDGsをテーマとして扱っているため、2030年に実現させることを目指した持続可能な具体的な案で解決させることを目指すのがよいのではないか。

- b 「グローバル探究」はグループでの活動を推奨しながらも、個人での活動も可能にしている。評価や成果などは個人になるのか。それともグループになるのか。
- c 「グローバル探究」は幅広いテーマを扱うのに、クラス担任2名で指導することには相当無理があるのではないか。
- d 「リージョン探究」と「グローバル探究」のルーブリックを比較したが、それほど難易度に差がある印象を受けなかった。2年生で難易度を上げるという意志を持っているのなら、ルーブリックを難化させるべきである。

(学校より)

- a 課題の設定を生徒に委ねるというのは本学でも初めての取り組みであり、手探りでやっている。テーマの範囲を狭めることで対応できると思っていたが、このような形での共通認識をもたせることで、生徒の探究活動の範囲が整理できると思うので、ぜひとも反映させる方向で考えたい。
- b 探究の評価については他者評価の視点を盛り込みたいと思っているので、個人で活動している生徒にも他者からの評価の視点が得られるように配慮すべきであると感じた。なお、成果に関しては個人のe-Portfolioに集約するように指導している。無料のものを使っているため、教員による確認が難しく、取り組みには個人差が見られている。なお、次年度から「Classi」の導入が決定しており、今後はもっと体系的に個人の成果の蓄積ができるようになっていくと考えている。
- c 確かに指摘されたように、課題設定を自由にするということは扱うテーマの幅も広くなり、対応が難しいのも事実である。ただし、探究活動に関しては、あくまでも主役は生徒、教員はアドバイザー的な存在と考えているので、教員が内容にまで口を挟む必要はないという認識を持っている。また、各学年に教育改革推進事業運営チームの教員が3~4名おり、相談できる環境は整えている。

③その他

(委員より)

- a これまで探究学習に関していくつもの学校の取り組みを見てきたが、現状調査・仮説など、とにかくテンプレート化している印象を受けていた。どこかにこのようにしなければならないという指導書があり、それに従わなければならないのかと思っていたぐらいだった。そう考えると和歌山信愛の取り組みは、自由度があって、それがバラエティに富んだアイデアや解決策に繋

がっている印象を受けた。ただ、課題解決の姿勢という点では、まだまだ物足りなさが残る。せっかく自由に考える下地があるので、もっとのめり込ませることは必要である。傍観者ではなく、当事者としての意識を持たせて課題に向き合わせてほしい。

b ポスターセッションでも感じたことだが、データの扱いを丁寧に行った方がよい。どこから引用したのかの明示がないものもあった。また、ネットからの転用ではなく、もっと自分たちで身近なデータを集めることを期待したい。

c 地域への普及という点で、様々な取り組みはしているようだが、もっと積極的に行った方がよい。具体的な取り組みなどが紹介された記事等をアップすれば、他校の参考になるのではないかと思う。

(学校より)

a これまで探究学習では生徒たちをあまり枠にはめることはしてこなかった。それは生徒たちが探究学習を楽しめるものだと感じ、より主体的に活動してほしいと思ったからである。しかし、ご指摘の通り、生徒をのめり込ませるといふ部分ではまだまだ働きかけが必要であると感じる。ぜひ運営指導委員の先生方のお力をお借りしながら、さらにこの方向を推進させていきたいと思う。

b データの扱いについては「情報」の授業任せの部分があった。これを機に情報科との連携を図り発表の際の基準を明確にしたい。

v 今後の予定

vi 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡 智

vii 閉会

② 第2回運営指導委員会

1 日時

2020年2月12日(水) 16:30 ~ 18:00

2 場所

和歌山信愛高等学校 本館3FホールA

3 参加者

和歌山県知事 仁坂吉伸 様(代理出席)

和歌山市教育委員会 教育長 富松淳 様(代理出席)

国立大学法人和歌山大学経済学部 学部長 藤永博 様(代理出席)

公立大学法人和歌山県立医科大学 理事長・学長 宮下和久 様(代理出席)

学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛大学 副学長 大山輝光 様

一般財団法人Future Skills Projects 研究会 事務局長 平山恭子 様

学校法人産業能率大学 入試企画部企画課長 渡邊道子 様

(推進校) 学校法人和歌山信愛女学院 理事長・和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

(推進校) 和歌山信愛中学校高等学校 教育改革推進事業運営チームの教諭 17名

4 内容

i 開会

ii 挨拶 学校法人和歌山信愛女学院 理事長

和歌山信愛中学校高等学校 校長 森田登志子

iii 事業進捗状況等説明 教育改革推進事業運営委員長 大村寛之

iv 協議事項 ※ 当日は研究成果発表会の後に実施した

①研究成果発表会について

(委員より)

a 信愛の特徴は、全体が集まった時に非常に整然としているところ。これまでいくつもの学校を見てきたが、この部分は他校と明らかに異なり、先生方の細やかな指導の程が感じられる。今回の研究成果発表会の最初に体育館に入場した時、全員が静かに落ち着き、姿勢を整えて待っており、けじめのついた様子は大人として非常に好感を抱いた。しかし、それが最終発表会の際には悪い方向に出てしまったかもしれない。前半の高校2年生の発表は張り詰めた空気になり、楽しむという雰囲気にならなかったように思う。休憩を挟んで後半の高校1年生の発表は多少慣れも出てきたのが質疑応答も盛り上がり非常に良かった。学年を越えて発表する機会が初めてということもあり、緊張したのだと思うが、場に応じた態度の切り替えは期待したい。

b 生徒の司会もはきはきとしており良かったと思う。発表の質にはばらつきは見られたが、優秀班が選ばれたということで内容的にもよかったものが多かったと思う。今年度は初年度という

こともあり、次年度はさらに充実したものになることを期待したい。

(学校より)

- a 運営側も張り詰めた空気にどうしようかとハラハラした。しかし、生徒たちの発表会なので、生徒たち主体で運営してほしいと思い、あえて何も口出ししたりはしなかった。ご指摘の通り、後半の雰囲気はとてもよいものになったので、生徒たち自身もそれを感じ取り、次年度に繋げてくれるものと思う。2年生の発表から行ったことで、2年生が1年生の前で下手なところは見せられないという気持ちが出てしまったのかもしれない。また、本学は人間教育にも力をいれており、会の最初などで姿勢を整え、私語をせず開始を待つというのは当たり前のことである。普段の講演などの際には、グループワークになると盛り上がっていたため、会の冒頭から盛り上がるべきところでは盛り上がるかと思っていたが、今回は緊張感の方が勝ったようである。
- b 協働学習の中での発表で、全員が何らかの形で発表することという条件をつけているため、どうしても性格的に内向的な生徒の発表部分ではそのようなことが起こってしまう。ただ、運営としては、難しいことであることは承知しているが、生徒全員にこの事業の学びを届けたいと考えている。できれば、大人しい生徒の必死の努力も認めていただけるとありがたい。

②最終発表会について

(委員より)

- a 短い時間で学年の全員が発表したようだが、マンネリ感などはなかったのか。

(学校より)

- a 特に「リージョン探究」は似たような発表が並ぶことになるので、最終発表の運営については非常に頭を悩ませている。今年度は、「グローバル探究」で想定以上の班数になったこともあり、2カ所の会場で発表するという方法にチャレンジしてみた。「グローバル探究」のテーマはバラエティに富んでいるので、「全部の発表を聞きたかった」という生徒からの不満もあったが、分野の入れ替えなども行いながら実施したため、マンネリ感は薄かった。一方、「リージョン探究」は同じテーマでの発表が続いたのでどうしてもマンネリ感が出てしまったように思う。また、制限時間を守らなかった班も多く、発表を途中で打ち切りにせざるを得ない場合も起こった。今後、運営の方法については考える必要がある。

③海外研修（カンボジア）について

(委員より)

- a 報告を聞くと、高校生段階で非常に貴重な体験を行うことができていると思う。もっと多くの生徒を連れて行くことは難しいのか。
- b この成果を学校で共有する仕組みはあるのか。
- c 海外研修で英語を使う機会は多かったと思うが、それが生徒の英語能力にどのような影響を与えているか。

(学校より)

a 我々もできるだけ多くの生徒にこの体験を届けたいという思いもあるが、文部科学省からの海外研修に関する支援は交通費のみ、かつ総予算のうちの2割という制約がある。また、本学は私立学校ではあるが、近年は不景気の影響か多くの渡航費を負担できる家庭も少なくなっている。何とかしたいとは思っているが現状ではこの形が精一杯である。なお、この人数であることが濃厚な体験に繋がるようにも思うので、現状のまま次年度も実施したい。

b 3学期の全校朝礼の際に研修の内容を共有する発表会を行うことになっている。その発表で海外研修に参加したいという思いを持ったという生徒も多く、いい流れはできあがっていると思う。

※ 今年度は当初3月13日(金)の全校朝礼で発表会を行うことになっていたが、コロナウイルス感染拡大防止による休校措置のため実施できていない。なお、現在動画を作成し、HP上で閲覧を可能にする予定である。

c あくまでも私見ではあるが、英語でのコミュニケーション能力には何の問題もなかったように思う。特に、現地の高校生との交流は事前にオンラインでコミュニケーションをとっていたことも上手く働き、非常にスムーズだった。ただ、注意しておきたいのは、このような研修に参加する生徒はそもそも非常に積極的な生徒であるということである。学校全体がこのようなタイプの生徒ばかりであるかというそれはまた別物である。全校生徒の英語でのコミュニケーション能力の底上げは非常に難しいがチャレンジしていくつもりである。

④評価について

(委員より)

a 自己評価、他者評価、教員からの評価を組み合わせた評価を行っているのはとてもよい取り組みだと思う。しかし、ルーブリックを使うと今の学生は無難に「A」をつける傾向にあるが、その辺りはどうであるか。

b 探究活動における内容面での評価に妥当性はあるのか。私の経験でもルーブリックを用いると取り組みの内容面における実感値と乖離する傾向がある。

(学校より)

a やはり女子同士で気を遣い合うところもあり、無難に「A」をつけあう傾向はあると思う。また、自分から見て見習うべき所があれば「S」をつけることにはためらいがない。ただし、「B」以下の評価はほぼ見られない。

b ご指摘のようなことは、本学の評価の中にも存在していると思う。しかし、それが正しいのかは分からないが、大切なのは生徒たちの探究活動に対するモチベーションではないかと考えている。他者からよい評価をもらうことで、次の活動に繋がっていくと思うので、内容に関する妥当性の高い評価よりもモチベーションを優先したい。

⑤生徒対象アンケートについて

(委員より)

- a 「社会貢献できる人になりたいか」などという質問があるが、すでにこのような気持ちを持っている生徒にとって、このような質問は答えにくいのではないか。また、中学から入学した生徒と高校から入学した生徒とでは、探究活動のスタート段階でマインドが異なっている可能性も高い。その辺りを別々に評価してみることも考えた方がよい。
- b 行政の視点からすると「地元についての理解が深まった」というような項目を盛り込んでほしい。地域に対する愛着を測る指標になると思う。
- c 地域への愛着を測るものとして「関係人口」を用いてみてはどうか。「関係人口」の概念を生徒に伝え、「関係人口」を育てていくような取り組みを意識させると、結果的に生徒が地域を離れても「関係人口」の中に属することになると思う。
- d 信愛はどうしても和歌山の市街地にあるため、医療や経済の面で比較的恵まれており、地域の悲観的な未来について実感しにくいのではないかと感じることもある。紀南地域にある学校だと実感値は高くなるように思う。

(学校より)

- a まだまだアンケート作成に慣れていないため、ぜひ参考にして改善していきたい。ただ、Google フォームを用いるとアンケートの集計の煩雑さから解放されることが分かったため、今後上手く活用していきたい。
- b この事業では、若い世代を地元に戻流するシステムを作っていくことも求められているので、「地域への愛着」をいかに育てるかにはぜひともこだわっていきたいと思っている。
- c なかなか一度都市圏に出てしまうとやはり利便性が良かったり、多くの仕事があったりで、地域に戻りたいという感覚を持ちにくくなってしまおうと思う。そのため、「関係人口」を高校生段階から意識させることはとても良いやり方だと思うので意識していきたい。
- d 確かにそのような部分はあるかもしれない。しかし、実感値が高い人だけが地域の未来を考えるのでは、早晚地域の行き詰まりを迎えてしまうことになると思う。実感値の低い本学生が本気で地域の未来を考えるような人材に成長していくようなプログラムを構築することができるならば、地域への貢献度合いもより大きくなるのではないか。
- v 次年度の子定
- vi 挨拶 和歌山信愛中学校高等学校 副校長 紙岡智
- vii 閉会

2019 年度文部科学省採択

地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）

研究開発実施報告書【第 1 年次】

発行日 2020 年 3 月

発行者 学校法人和歌山信愛女学院和歌山信愛中学校高等学校

校長 森田 登志子

所在地 〒640-8151 和歌山市屋形町 2-23

電話 073-424-1141 Fax 073-424-1160

H P <https://www.shin-ai.ac.jp/>